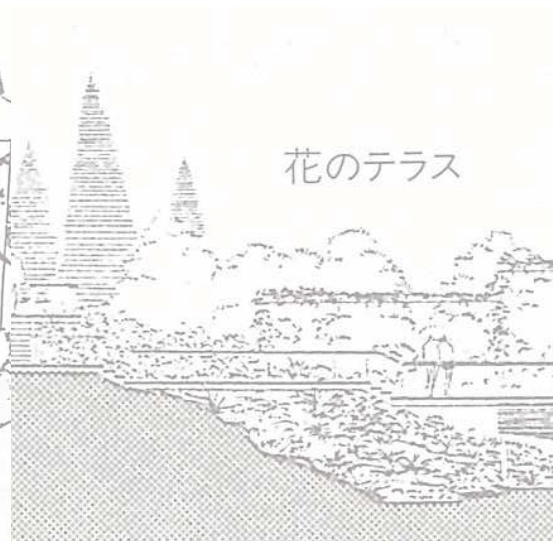
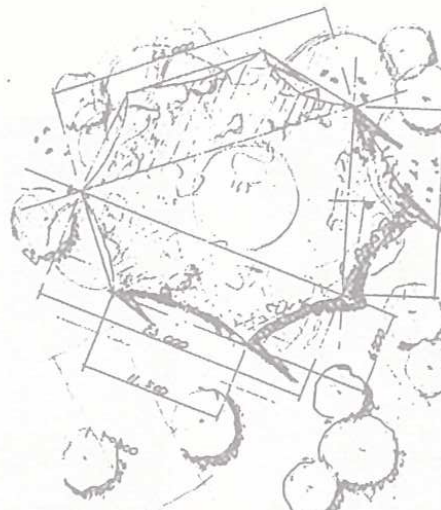
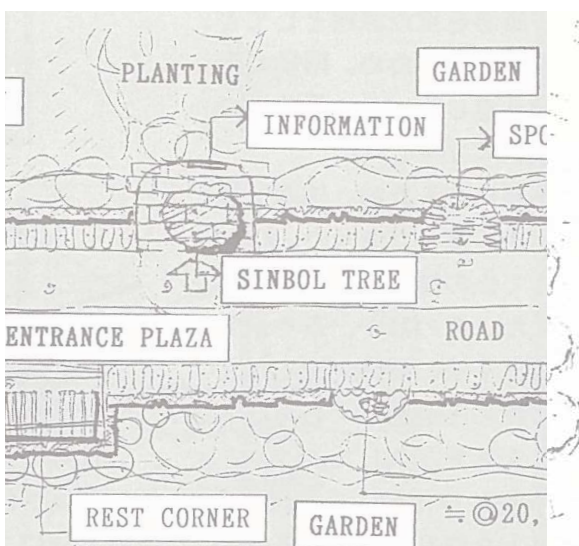


「国際花と緑の博覧会 (1990) に学ぶこと」講演会 記録集



「国際花と緑の博覧会 (1990) に学ぶこと」講演会 記録集

目次

開催趣旨	1
開催概要	2
講演者・パネリスト・コーディネーター プロフィール	4
講演会 / パネルディスカッション	10
第1部 講演会	14
① 宮崎 研一 氏(元大阪市建設局花と緑の推進本部長)	14
② 松本 守 氏(フジテレビ総合開発局特区事業室)	23
③ 大塚 守康 氏(㈱ヘッズ取締役会長)	32
第2部 パネルディスカッション	42
パネリスト：第1部 講演者	
コーディネーター：糸谷正俊氏(㈱総合計画機構相談役)	
総括	60

<資料編>

資料1 講演者 発表用スライド

資料2 講演会当日配布資料



開催主旨

鶴見緑地において「自然と人間との共生」をテーマに開催された国際花と緑の博覧会（1990年4月1日～9月30日開催。以下、「花の万博」という。）は、大阪はもとより多くの地域で花と緑による多様な緑化へと展開していく契機となった。この花の万博が終了して25年、その開催から現在に至る成果と課題について、現在、多方面で活躍する当時の関係者が語り、これからの都市緑化と造園界のあり方についても議論した。



開催概要

本講演会は、(公社)日本造園学会関西支部設立 50 周年記念事業および国際花と緑の博覧会開催 25 周年記念事業として開催した。開催概要は以下の通りである。

開 催 日 平成 27 年 1 月 31 日 (土) 13 時～17 時

会 場 鶴見緑地内 花博記念ホール (陳列館ホール)

参加者数 128 名

プログラム

12:30 受付開始 (会場内にて花の万博開催時の DVD 放映)

13:00 開会

13:10 第 1 部 講演会

① 宮崎 研一 氏 (元大阪市建設局花と緑の推進本部長)

② 松本 守 氏 (フジテレビ総合開発局特区事業室)

③ 大塚 守康 氏 (株ヘッズ取締役会長)

15:30 第 2 部 パネルディスカッション

パネリスト : 第 1 部 講演者

コーディネーター: 糸谷 正俊 氏 (株総合計画機構相談役)

16:50 総括 糸谷 正俊氏

17:00 閉会

主 催 (公社) 日本造園学会関西支部
(公財) 国際花と緑の博覧会記念協会
(一財) 大阪スポーツみどり財団
大阪市

協 力 (一社) ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部

講演者・パネリスト・コーディネータープロフィール



講演者・パネリスト

宮崎 研一 (みやざき けんいち)

西暦 1937 年生まれ
元大阪市建設局花と緑の推進本部長

花博当時の所属・役職及び主に携わってこられた仕事の内容について

・花博当時の役職

開幕前：国際花と緑の博覧会協会計画建設部長

開幕後：国際花と緑の博覧会協会施設管理部長

・従事した仕事の内容

会場計画の作成

協会が設置するインフラや各種修景施設等の設計施工

会期中は、安全管理を中心に施設の管理運営を担当

その後から現在までの略歴

平成 2 年 (花博後) 建設局花と緑の推進本部花博整備部長

平成 5 年 大阪市公園協会常務理事兼咲くやこの花館長

平成 6 年 花と緑の推進本部長

平成 8 年 大阪市退職

花博記念協会常務理事

平成 10 年 大阪市公園協会退職

その後、設計事務所 顧問として 5 年間勤務

現在、鶴見緑地咲くやこの花館にて、緑化ボランティアとして、緑化相談業務に従事

一級造園施工管理技士、技術士(都市計画部門)

(一社) フラワーソサエティー理事



講演者・パネリスト

松本 守 (まつもと まもる)

西暦 1949 年生まれ

フジテレビ総合開発局特区事業室

花博当時の所属・役職及び主に携わってこられた仕事の内容について

計画建設部 計画課長

企画調整部 審議役

計画建設部では、会場計画の策定、協会各部局等との計画調整、出展者等との計画調整等
企画調整部では、協会各部局間の事業調整、関係省、府、市との予算調整、民間寄付金の調整等

その後から現在までの略歴

住宅・都市整備公団公園緑地部公園事業計画課長

建設省都市局公園緑地課公園・緑化事業調整官

(財)都市緑化技術開発機構都市緑化技術研究所 研究第一部長

建設省都市局公園緑地課長

国土交通省大臣官房審議官(都市生活環境担当)

(株)フジテレビ(エフシージー総合研究所上席研究員)

(株)フジテレビCSR推進室長

(株)フジテレビ総合開発局特区事業担当(現職)



講演者・パネリスト

大塚 守康 (おおつか もりやす)

西暦 1942 年生まれ
株式会社ヘッズ取締役会長

花博当時の所属・役職及び主に携わってこられた仕事の内容について

(株)ヘッズ 代表取締役社長
ランドスケープコンサルタンツ協会花博ワーキンググループのディレクター
会場計画委員会への調整
都市計画、建築などランドスケープ以外のデザイナーとの指導調整

その後から現在までの略歴

平成19年 9月 (株)ヘッズ 代表取締役を退任
(株)ヘッズ 取締役 会長に就任

昭和53年～平成24年 現 (一社)ランドスケープコンサルタンツ協会理事
平成5年 ～平成7年 日本都市計画家協会理事
平成9年 ～平成15年 現 (公社)日本造園学会理事
平成12年～平成15年 世界造園会議 (IFLA) 日本代表
平成19年～平成23年 Japan IFLA 会長
平成24年～現在 (一社)ランドスケープコンサルタンツ協会顧問
平成21年～現在 (一社)都市計画コンサルタンツ協会運営委員

昭和60年～平成8年 大阪藝術大学 環境デザイン学科 講師 (非常勤)
平成9年 ～平成15年 立命館大学工学部第1部 環境システム工学科
講師 (非常勤)



コーディネーター

糸谷 正俊（いとたに まさとし）

西暦 1947 年生まれ
株式会社総合計画機構相談役

花博当時の所属・役職及び主に携わってこられた仕事の内容について

花博スタート時は、社団法人日本造園コンサルタント協会（現ランドスケープコンサルタンツ協会）が設置した花博プロジェクト室（1986～87年）、後、国際花と緑の博覧会会場計画事業室（1988年）のスタッフとして、会場基本計画策定に関与。その後、(株)総合計画機構のスタッフ（1988～90年）として観客動線計画、花壇植栽管理計画等を担当。

- ・会場計画策定業務その1---花博プロジェクト室非常勤スタッフ
- ・会場基本計画策定業務---国際花と緑の博覧会会場計画事業室スタッフ
- ・会社の受託業務として、観客動線計画、観客流動シミュレーション調査、花壇植栽管理基本設計、花壇植栽管理実施設計等を担当

その後から現在までの略歴

- ・(株)総合計画機構代表取締役（1983～2010）、(株)公園マネジメント代表取締役
（2007～2010）を経て、現在(株)総合計画機構相談役、(株)公園マネジメント研究所経営顧問
- ・合同会社オフィス・エダ（2012～）社員
- ・(社)ランドスケープコンサルタンツ協会理事（1988～2010）
- ・(一財)大阪府公園協会理事（2012～）
- ・特定非営利活動法人社叢学会理事（2002～）
- ・特定非営利活動法人国際造園研究センター理事（2002～）
- ・公園管理運営士会関西支部長（2013～）

講演会 / パネルディスカッション

プログラムは2部構成で実施し、前半は、3名の講師から花博当時の様子についてご講演いただいた。後半は、3名の講師とコーディネーターによるパネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、参加者からの質問や、講演での補足説明をもとに意見交換を行った。

趣旨説明

上田正敏（大阪市建設局理事）

皆様、こんにちは。ご紹介いただきました大阪市建設局の上田でございます。本日、「国際花と緑の博覧会(1990)に学ぶこと」講演会に本当に多数の皆様にお越しいただきまして、ありがとうございます。また平素は大阪市の公園緑化行政に対しましてご理解、ご協力を賜りまして、ありがとうございます。大変高い場所からではございますが、この場をお借りして御礼申し上げたいと思います。

皆様もご存じのように、平成2年に「花の博覧会」が開催されて、今年、25周年を迎えます。四半世紀が過ぎたということで、私も職員の中にも花の万博を知らない世代が入ってきておりまして、「何、それ」というようなことがございます。私の年からしてみますと、千里万博が小学校の時代にあったので、役所に入った時に苦労話を聞かされて「そうやったの?」ということがあったんですが、25年という年月は結構長く、重みがあるということかと思えます。



趣旨説明（上田理事）

大阪市におきましてこの花の万博がどういった意義があったのかということですが、皆さんご存じだと思いますけれども、もともとは樹木を中心とした緑を増やしていった。もともと緑の少ない大阪市でございましたので、樹木を増やしていく。そういった行政に対しまして、この万博が何をもたらしたか。やっぱり花ですね。街中に彩りをもたらすということで、この花の万博を契機としまして、まちづくりに花が入ってきた大きな転換点になったと思います。

花の万博は無事成功裏に終わったということで、その理念あるいは成果をいかに大阪市のまちづくりに継承していくか。これが我々にとりましても大きな課題でございました。大阪市の場合はどうしていくかということで、公共空間の緑化、それから民有地の緑化を両輪で進めていくことにいたしました。もちろんそのために普及啓発活動が非常に大事だということで進めていったわけでございます。

中でも民有地緑化をどうして進めていかにつきましても、何せ行政だけではなかなか進めていけないということで、地域における緑化活動をいかに推進していくかが重要なポイントでございました。そのために大阪市内では、平成3年度から緑化リーダーの育成ということで、緑化ボランティアの方々の育成を始めました。そして、より高度な知識をお持ちのボランティアの方を養成したいということで、平成13年度からグリーンコーディネーターの方々の養成をさせていただいて、この方々が、もう25年たちましたけれども、各々の地域におきまし

て緑化活動にご活躍いただいているという状況でございます。本日もグリーンコーディネーターの方々にたくさんお越しいただいていると聞いております。

そのような経緯がございまして、今回、この講演会のお話を大阪市として頂戴いたしました時に、関係団体さんとともに講演会を主催させていただきたいということで、本日を迎えたわけでございます。

皆さんご承知のとおり、地球温暖化についてテレビとか新聞等で報道されているわけでございますけれども、そのために我々がどう対処していくか。我々にとしましては、快適な生活空間の確保、それから良好な都市環境の醸成のために、それを阻止していかないといけない、そのためにはやはり緑化が非常に大事になってくるということでございます。

先ほどスライドにもございましたが、花博の時のテーマが「自然と人間の共生」でございます。これを今日、皆さんと一緒に振り返って、今後の都市緑化のあり方、あるいは花と緑のまちづくりをどう進めていったらいいかについて一緒に考えさせていただければ、非常にありがたいなと考えております。

5時までということで非常に長時間でございますが、最後までどうぞおつき合いただければありがたいと思います。本日は、本当に多数ご来場いただきまして、ありがとうございます。

主催者代表挨拶 上甫木昭春
(日本造園学会関西支部支部長)

ただいまご紹介いただきました大阪府立大学の上甫木でございます。日本造園学会関西支部の支部長をやっております。今日は、こんなにたくさんお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。主催者を代表しまして御礼申し上げます。

皆さんのところに講演会の資料が配られていますけれども、この後ろのほうに今回の講演会の主催者と協力ということで書かせていただいています。造園学会の関西支部の方で企画をいたしまして、ここに書かせていただいている方々の協力のもと、今日の会が開催できるということでございます。造園学会関西支部は、来年、設立 50 周年を迎えます。それで、来年に向けてこの 50 年間の歩みを振り返ってみようということになりました。その間、大きな博覧会が 3 つございましたので、それを中心にして講演会をやっという企画を立てたということです。

今日は一般の方もたくさんいらっしゃいますので、日本造園学会の成り立ちを簡単に説明いたしますと、本部の学会は、今年が 90 周年です。関東大震災の後、設立された



主催者代表挨拶（上甫木支部長）

ということです。造園学会は、庭づくりだけではなくて、生活環境の改善や自然環境の保全、再生といった、我々の生活環境の質を高めていこうということでこれまで幅広く取り組んできているとご理解いただいたらありがたいかなと思います。

今回の講演会は、鶴見の花博をテーマにやるわけですが、先ほど上田委員からもお話がありましたように、非常に大きなエポックになった博覧会だったと思います。それまでの博覧会というのは、どちらかというと建物の中の展示を楽しむといったことが主だったのですが、この鶴見の花博は、屋外の環境をどう考えたらいいのかということが非常に大きなテーマでした。これをきっかけに花の生活文化みたいなものがどんどん芽生えてきたんじゃないかと理解しております。

今日は、その当時、どういった取り組みがなされたのだろうか。もう 25 年前になりましたので、それをもう一度振り返りたい。関係される様々な立場の皆様、それから造園学会の関係の皆様とともに、その時の知恵とか技術、それからたぶん非常に熱い思いで取り組まれていると思いますので、そういうものを聞かせていただいて、これからどう継承していったらいいのかといったようなことを皆さんと共有化したいなと思っております。

夕方まで大分長い時間になりますけれども、ぜひ最後までおつき合いいただいて、それぞれよい刺激を獲得して持ち帰っていただけたらありがたいと思います。それをお願いいたしまして、開会のご挨拶にかえたいと思います。最後までよろしく願いたします。

第1部 講演会

講演①

「会期前の1000日と、183日」

宮崎 研一氏（元大阪市建設局花と緑の推進本部長）

ご紹介いただきました宮崎でございます。40分間ほど時間をいただきまして、おもしろい話になるかどうか自信はございませんが、おつき合いのほど、よろしくお願ひしたいと思ひます。

■ 花博開催までの経緯

きょうは朝から雪がちらついて、やはり冬だなあとということで、ちょうど平成2年の会期の前、1月、2月、やはり雪が降りました。皆さんご存じのとおり、この鶴見緑地というのは人工の土地でございます。生ごみ、あるいは公共工事が出た瓦礫その他で埋め立てし、山を積み上げていった場所です。したがって、土が非常によろしくないわけで、開会3カ月前に雪がかなり積もりました。そうしますと、重機でこね回して、また状態が悪くなる。寒かったので、なかなか雪も溶けない。溶けてからがまた泥状態というようなことがしばらく続きまして、オープンに間に合うのかどうか、大いに悩んだといひますか、困ったなあとという感じでございます。

その始まるまでの間、どういう経過で花博が行われたのかということについて少しご説明したいと思ひます。もともとはこのイベント、大阪市が市制100周年記念事業として考え、スタートしたものでございます。ちょうど1989年、大阪市制が100年

を迎えるということで、皆様ご記憶の方もおられるのではないのでしょうか。そのイベントとして大阪城博覧会があったり、あるいは大阪空港の開港があったりした時代でございます。その100周年の一つの大きなイベントとして何をやろうかということで、昭和56年、1981年の5月から8月ごろに、大阪市は市の職員に対して提案を募りました。100周年事業として何がいいかということでアイデア募集をしたところ、その中の一つに花の博覧会というものがあったわけです。それで、いろいろ調査しながら、どんなことができるのかということで積み上げてまいりました。56年暮れに花の博覧会調査会というものできて、そこでさらに検討を進めました。

市制100年は昭和64年でございますけれども、新しい場所を求めるについてはちょっと時間的に間に合わないということがございまして、では大阪市内にある広大な



宮崎氏の講演の様子

場所といいますと、この鶴見緑地ではないかなということで、鶴見緑地を一つの候補地に挙げたわけです。繰り返しになりますが、今でこそ大阪市は 100%廃棄物は焼却処分になっておりますけれども、当時はまだまだ清掃工場ができておりませんでした。したがってここで埋め立てをしていたわけです。その後もしばらく、南港で埋め立てをしていました。今はほとんど 100%焼却処分で、灰を処分しているだけと聞いております。そういった新しく作り出した場所で新しい発想を持ったイベントを行うのが適当でなからうかということで、この鶴見が選ばれたわけでございます。

この緑地の歴史を簡単に申し上げます。古い話ですが、昭和 16 年、1941 年に都市計画決定、ここは公園にしますという意思表示、これは行政が行う手続ですが、その手続がなされまして、この鶴見緑地が緑地と位置づけられました。何の緑地かといいますと、防空緑地。空からの攻撃を守る緑地という考えがございまして、防空緑地として機能するように指定されたということです。昭和 16 年は第二次大戦の前で、いろんなことが考えられていた時代で、戦争対策の一つであったわけです。

それで、もともと計画決定をして大阪市有地になっていた部分があったのですが、当時の現状は農地でございました。昔のことをご存じの方は、農地解放という手続があったことをご存じだと思います。大阪市の市有地、形状は農地でございましたので、農地解放ということで小作の方に農地を返すという経緯がございまして、それが民有地になってしまって計画決定だけ被っているということから、土地の再買収にかかっ

たのが昭和 37 年でございます。造成工事といいますのは、残土や塵芥、ごみで埋め立てを始めたのが昭和 45 年。それで現在の状況に至っております。

花の博覧会構想に戻りたいと思います。だんだん中身が決まってまいりました。大温室を建てたい、植物の科学に関する建物を建てたいと、いろんなアイデアが出てきております。そのアイデアが現状にまで至っているものは、残念ながらございません。昭和 57 年 3 月の市会におきまして、この考えが煮詰まってまいったものをベースにして、市制 100 年事業の一つとして、花の博覧会を始めるという意思表示をいたしました。それで、大阪市がやる博覧会ということで、前へ進み出したわけでございます。

ちょうどその年に、ヨーロッパにおきまして、こういった類の花の博覧会が挙行されておりました。その一つとしてオランダのアムステルダムで行われておりましたフロリアード。これはオランダ版の花博です。ヨーロッパは伝統的にこういうイベントをやっておりました。また少し話が脱線いたしますが、博覧会というのは、そもそも日本では明治時代に内国勸業博覧会というのがございまして、そこでは新しい工業製品を展示したり、いろんな産品、産業あるいは農業によって作り出された製品を展示して、順位を決めて競い合うというものがございました。

それに似たようなことで、古くからヨーロッパでは園芸家のグループが集まりまして、各国でいろんな花に関するイベント、切り花とか花の種、苗、球根、あるいは農産物の野菜、果樹といったもののコンテストを

開いていたわけです。そのイベントが参考になるのではということで、大阪市からも調査にまいりました。その調査の結果、どうも園芸に非常に偏ったといいますと表現がよくないかもしれませんが、園芸に偏したイベントでは、果たして日本では人が集まるのかという心配の種も出てきたわけでありました。その年のフロリアードの入場者数は、およそ 460 万人。話が飛びますが、花博会期終了時点での総観客数は 2,200 万を超えております。そういったことで、460 万がどうなのかということで、これも議論の対象になった。その後、ヨーロッパでは、その翌年にドイツの花博、それからリバプールでイギリスの花博、こういったイベントがずっと続いていまして、それもあわせて調査をしました。

入場者数想定は、あとの計画のいろんな施設の量と数にからんでまいります。例えば会場内の道路の幅をどうすればいいかという時に、どれぐらいの人が入るかによってそれが決まってくる。あるいは、卑近な例といたしましては、トイレも、どれぐらいの数が入るかによって数が決まってまいります。そういったことを検討するために入場者数の予想が必要になります。それで、どこにその数字を求めたかと申しますと、昭和 56 年に行われました神戸のポートアイランド博。これも記憶にお持ちの方がおられるかもしれません。そういったイベントを参考にいたしまして、フロリアードの 460 万よりは多いだろうと。それから、ポートアイランド博は 1,600 万人だった。そこまではいかなかなかというふうなことで入場者数の想定を立て、それに基づき、さらに博覧会の中身を詰めてまいりました。

ちょうどそのころ、鶴見の一部、東側の「世界の森のエリア」と当時は呼んでいたんですけども、その部分の造成が進みまして、一部開園をし、イベントをおこなったところ、入場者数の様子を見ておきますと、多い日で 1 日 12 万人ぐらいの市民の方、もちろんここは守口や東大阪も近いですから、周辺の市町村を含めてお見えいただいた。これはなかなか魅力のあるイベントだという認識を市民の方、入園者の方々が持っていたいているのかなという判断をすることができました。これらの事実をもとに開催に向けて手続、作業を進めていきました。

なぜこういうイベントが必要なのかといいますと、やはり都市の活性化。もちろん市制 100 年という大きな意味でのイベントということでもございますけれども、博覧会をやったほうがいいということになっているわけでありまして。大阪で大成功しました千里万博、日本万博 EXPO70 でございますが、これも記憶に残っている方もいらっしゃるかと思います。これは、1970 年の 3 月 15 日に開会いたしまして、183 日、入場者数は 6,400 万人に達しています。ものすごい数字です。この時、大阪市の事業といたしましては、新御堂筋の開通であるとか、築港深江線の建設や大阪港の整備、あるいは大阪城公園の整備と、いろんな公共施設や地下鉄のさらなる延伸等々、公共事業がこの万博を機に大いに進んだわけです。そういった意味で都市に活性化を与える 1 つのイベントであるという認識は、前からございました。昭和 56 年当時には「大阪城築城 400 年祭り」をやったわけですけども、「大阪 21 世紀計画」というのが同時期に進行しておりまして、その 1 つの事業とし

てなされたわけです。これも入場者数は大変多く、530万人の人が集まりました。ということで、大阪は万博を上手にすることでございますので、この花博もうまく進むのではなかろうかということでございました。

一方、花博をする大阪市はどれぐらい花や緑に貢献しているのかといいますと、昭和39年、大阪市長の中馬馨さんが大阪市を緑にするということで、「緑化百年宣言」が出されました。その思想は、もちろん緑の増量でございます。もう一つは、緑化思想の普及啓発ももちろん行われてきたわけです。例えば昭和39年当時288カ所、340ヘクタールの公園が、平成2年には813カ所、771ヘクタールになって、現在はさらに増えておるところでございます。平成2年当時の1人当たりの公園面積を見ますと2.93平米、まもなく3平米という状態でした。樹木は、公園街路樹の合計が39年44万本だったのが、平成元年には610万本ということで、大阪市は緑に対して非常な努力を重ねてきたという経緯がございます。

そういった背景を持ち、昭和59年には、大阪市一丸となりまして花の博覧会をさらに前へ進めるよう努め基本構想をまとめながら、科技博がちょうど85年に筑波で行われ、そのあとの博覧会として大阪花博をエントリーしたいということで動いておりました。

■ 国際博覧会の開催手続

国際博にするには、やはり国の協力が大切であります。したがって、今でいいます国交省、当時の建設省はもちろんのこと、農水省や大阪府、あるいは当時ございま

した大阪21世紀協会や大阪商工会議所、関経連、都市緑化基金、守口市等の近隣都市の協力を仰ぎ始めたところでもございました。59年の11月に大阪市長が建設大臣を訪問いたしまして、鶴見緑地で国際的なイベント花博をやりたいと陳情いたしたところ、では現場を見てみようかということで、当時の建設大臣に乗り出してきていただいて、さらに実現に近づいてきたということです。

ところが、大規模な博覧会、総合博といいますが、千里万博のような種類の博覧会は、10年に1回しか催すことはできません。1つの国で10年に1回です。その次のランクとして、テーマを限定した博覧会がございます。これが筑波の科技博ですが、それに該当する園芸に限定した博覧会をできないかということで、当時いろいろ探っていたわけですが、その大博覧会と個別の博覧会いずれにしても、BIE、これは国際博覧会のコントロールをしている組織ですが、そこの了承が要るということで、しかもそこには同一国で博覧会は5年に一遍でないといけないというルールがございますので、大阪市が当時考えておりました89年の博覧会開催は、ルール上無理であるということになりました。科学技術博の5年先ということになりますと、次は1990年。市制100年と合わなくなったわけです。しかし、やるからには国際博でないと、観客動員もなかなか大変だろうというふうなこともございました。たまたま当時、日本のほかの都市でも同じような考え方を持った方が動いておられた。それを見ておるだけではだめで、何とか大阪でやる花博を具現化したいということで、さらにいろいろ働きかけを広げてやったわけです。

今申しました BIE の中に 20 項目の特別博がございます。その中に、残念ながら園芸、花や造園という項目がございません。といいますのは、AIPH というヨーロッパの園芸家のグループが BIE の博覧会より先に始めました。そういったちょっと先進した面がありましたので、恐らく BIE はその 20 項目の特別博の中に園芸を入れなかったのではなかろうかというのが私の推測です。

じゃ、どうすればいいのという話なんです、この AIPH のほうに園芸あるいは造園の団体が加盟する必要があります。それにまず加盟して、そこで博覧会開催の同意をもらいまして、それに基づいて BIE に申請するという、ちょっと手の込んだやり方をしないとできないということがわかりました。そういった検討をしております間に、国際博にするならいっそのこと国のやる国際博にしたらどうかという動きになりました。ここから先は国交省が主になっていろいろ動いていってくれたわけでございます。国交省のみならず、農水省も一緒になりましたし、BIE への加盟の手続は通産省の仕事であります。もちろん外国に出展要請する必要もございますので、これは外務省ということで、国挙げての協力体制がまとまることになるのですが、そのあたりにつきましては、あとで登壇されます松本さんのほうからご説明があらうかと思えます。こういったことで国際博としての花博が具現化していくわけです。

その間を少し飛ばしまして、では花博は どういうふうにして進んでいったかといいますと、幸いなことに AIPH へ加盟することもできました。加盟しました団体は日本造園建設業協会という団体で、これは造園

施工業者の集まりでございます。それが全国的に組織を持っておりまして、オールジャパンの組織であるということで加盟が認められました。さらに、同じ年に博覧会を 90 年に開きたいという申し込みを AIPH にいたしましたところ、これも同意を得まして、BIE のほうに申請することに相なったわけでございます。これが鶴見緑地の花博に入る前の状態でございます（下図）。1日に 17 万人入ったというイベントをしたのは、山のエリアがここですから、この（下図左側）あたりの区域です。

国の動きは少し飛ばしまして、いよいよ鶴見緑地で花博をやるのにどういう手続、あるいは構想があったかということをお話ししたいと思います。

この時点でもそれなりに樹木は繁茂しておりました。しかし、計画を遂行するためにはやはり現状の変更が必要で、特に西側にございました乗馬園ですとか、西南隅の貸し農園、これも全部撤去する必要があるということが出てまいりまして、大阪市は撤去作業に入ったわけでございます。その時私もこの仕事に参画しておりましたが、花博の準備期間に入るちょっと前で、せっかく樹木が生えているのになぜ引っこ抜くの



花博前の鶴見緑地

かと、このあたりに動物園で飼いますコア
ラのためのユーカリなども植えていま
したが、それも移植の必要が出てきて、そ
ういう工事に入りますと、すぐ新聞社が、
なぜそんなことをするんや、博覧会で
木を植えるんやろう、なんで木を切る
んやと。その翌日の新聞に「なぜか木
を切る花と緑の万博」というタイトル
で書かれました。それに対してどうであ
ったかについては、ここで申し上げる
ほどの反応があったわけではございま
せんけれども、やはり緑を扱う人間とし
ては、心が少し痛む表現でございました。

■ 基本構想/基本計画段階

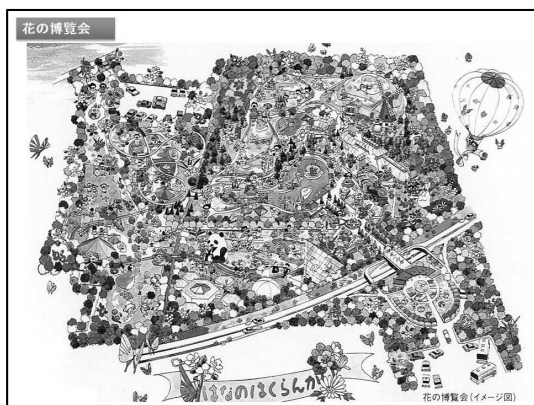
そういったこともありまして準備に入
ります。こういう博覧会をやるには、ま
ず、どういう考え方で、どういう内容
で、どういう手法で博覧会をやるのか
ということを決めていかなければなり
ません。その1つが基本構想の決定で
す。それに従いまして会場の基本計
画をつくっていくことになります。会
場の基本構成は、大体3つぐらい、
山のエリア、野原のエリア、街のエ
リアというふうなエリアを決めまし
て、そのための具体的な内容まで詰
めていく作業に入っていたわけです。
何しろ準備期間を含

めて3年ほどしかございません。非常
に限られた準備期間の中で何とか具
体的に仕上げねばならないというこ
とで、後ほどご登場されます大塚さ
ん、会場計画策定の造園コンサルタント
のほうから多大な協力をいただいて、
その作業を進めていきました。

これが当時の大阪市のつくった花博
のプラン（左下図）。先ほど見ていた
航空写真のとおり、道路もありますし、
それから池、ここに大温室を建てて、
これを中心の建物にしてイベントを
やろうという絵でござ

います。基本計画の策定はもちろ
んやっておったわけですが、併せて
イベントのPRをしなければませ
んので、こういうシンボルマーク
とかロゴとかマスコットを決めて
いったわけです（右下図）。このマ
スコットは、「花ずきんちゃん」とい
う名前がつけました。これは、福岡
在住の女性のデザイナーが考えら
れて、今は亡き漫画の大家、手塚
治虫さんが手を加えられて、こう
いうデザインになったわけです。

博覧会の仕組みがどうなっている
のかといいますと、BIEとAIPH
というのがあり、AIPHはいわゆる
園芸博を仕切るところでありまし
て、国際園芸家協会という組織が



大阪市にとる花博のプラン



花博のロゴとマスコット

これをやっております。その花博にはA類、B類、2つございまして、花博はA類に該当するわけですが、これにエントリーしてBIEに申請しますと、このEXPO90が成り立つわけです（左下図）。

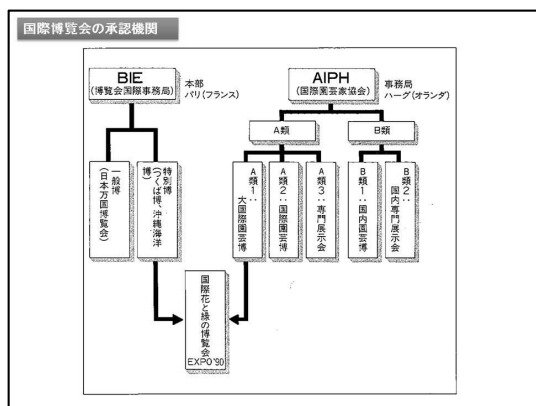
私も緑屋でございますが、当時、大体どれぐらい緑屋さんがこの博覧会にかかわっていたかということを示してあります（右下図のグレー網掛け）。大きな組織の中で、そんなにたくさん緑屋がポストを占めていたというわけではございません。しかし、この基本計画あるいは実施計画すべて、緑の人たちが具現化をしたわけです。

それで、最終の会場計画はこういうふうになりました。細かい内容については、また後ほど説明があると思います。

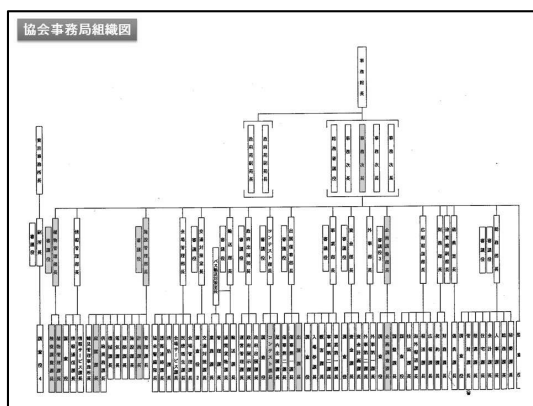
私が担当しておりました計画建設部はどんなことをやったかといいますと、もちろん造園コンサルタント協会から出てきたいろんな実施設計、造園あるいはインフラに関する設計を具現化していく。業者に発注して、それを具現化していくという仕事でございます。中でも変わったところを申しますと、建物を建てますので、建築関係でいろいろな手続が入ってきます。これは会場が守口市と大阪市にわたっています。大体

守口市がこれぐらいのところに入ってきています（次頁左下図）。それ以外が大阪市ということになります。2つの行政区にわたっていますので、建築関係は、普通は自分が建物を建てるところの行政へ持っていかないといかんということがございましたけれども、これは全国的なイベントであり、1つにまとめてするほうが参加者にとって便利であろうということで、大阪市が建築指導を担当した。ただ、それでも認められている建物というのは今まで実績のある建物で、建築基準法に合致した建物でなければ認めることはできません。その場合はどうするかといいますと、新しい工法とか材質を使う時には、国交省の外郭団体の建築研究所に委託して判断してもらおうという手続をとります。今までの博覧会で変わった建物が申請されていますので、ほとんど前例があるということで、大体はパスしたところでもありますけれども、一部、やはり評価を受けたものがございます。

もう1つ、当時を覚えておられる方があると思いますけれども、これがメインのエントランスですね。ここに地下鉄の駅がございまして。道路計画は、もともとの都市計画決定はこうなんです。地下鉄がここへ出



国際博覧会の承認機関



協会内に占める造園関係者

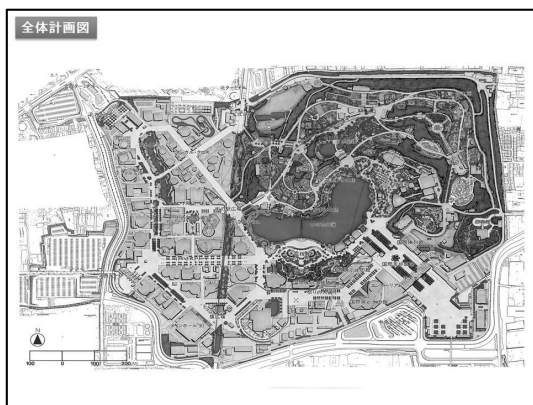
てきて、道路をまたいで行くのか、あるいは地下道を掘ってこちら側に出口をつくるのか、いろいろ検討しました。それで、やはり地下道を掘るのはべらぼうなお金がかかりますし、高速道路が鶴見の東側まで来ていますけれども、それが都島まで抜けるという都市計画が今もあると思いますが、あまり掘れないということで、ここから直接歩いていけるように道路を曲げました。ところがここには大阪市の水道のでっかいパイプが入っています。そこへ大きな荷重がかかりますと、破裂の可能性もなきにしもあらず。どうしてその荷重を避けるかという検討をいろいろしました。その結果、掘削しまして、管を防護し、その上に発泡スチロールを入れる。発泡スチロールですと荷重がかかりません。そういうふうなことをして、このへんに確か通っていたはずですけど、あえて地下鉄の出口から会場への一体化を図ったということがございます。

そういったことで、雨の日も風の日も作業を続けながら、どうにか会期に間に合わせたという経緯です。最終的な3月になりますと、皆さんが心配してくれます。間に合うのか、間に合うのかと、いろんなところから問い合わせがございました。「あんだ、嘘

言ってるんじゃないでしょうね。本当に間に合いますね」とダメを押されたこともございます。幸いなことに、無事開会を迎えることができました。

もう1つは、外国庭園の参加。これは出展部というところで受けていたわけですが、施工については私どもの計画建設部が担当しておりました。外国から基本設計というかアイデアをもらいます。それを具体的な設計にするわけですが、本国から来られる国もあれば、そんな旅費はないという国もいろいろありました。ですから、コンセプトだけは出してくださいということで、事務所とか設計者が来てくれるところはそれでいいんですが、出してもらって、それをこなしながら、会場計画のコンセプトに合わせながら、そのお国柄をあらわし、さらにその国の植物を展示できるような形にする。いろいろ苦勞もありまして、準備期間中は休みをもらいましたが、結局開会中の183日間、トラブルないか、事故が起こらないかということで、休みもとれずに、痛い胃を抱えながら会期の終末を迎えたといったことでございます。

まだ少ししゃべり残したこともございますけれども、それはパネルディスカッション



最終の全体計画図



会場全景

ンの時に時間をいただきまして、お話、あるいはご質問に対して答えていきたいと思
います。非常に粗雑な話で失礼いたしました。
私の話はこれで終わらせていただきます。

講演②

「花の万博の経緯と成果」

松本 守氏（フジテレビ総合開発局特区事業室）

花博が終わってから 25 年たっていますけど、20 年ぶりぐらいにここへ来ました。新幹線で東京から来て、環状線に乗って、鶴見緑地線でここまでまじめにちゃんと公共交通で来ましたけど、大阪って随分変わったなあと。環状線で梅田から桜ノ宮ぐらいまで、昔我々がいたころは相当遠くまで見えたような感じがしましたが、両側がビルで囲まれていて変わったなと思いました。桜ノ宮から京橋の間はあんまり変わってなくて、あ、そうそう、これだったなと思ったんですけど。で、京橋の地下鉄の駅のほうへ下りてきますが、あそこにモールというか、結構食べ物屋さんがたくさんあって、あれがほとんど変わってない。僕の記憶でいうと、昔のお店がそのまま入っているところが 8 割方あったんです。これも東京だと考えられない。東京だと全部入れ替わっていると思うんですけど、大阪の人はやっぱり腰が座っているなという感じがしました。

あと、地下鉄に乗って鶴見緑地に上がってきましたけど、バリアフリーにされていないのはびっくりしますね。花博の時につくったままで、あまり変わってないんだと思うんですけど、駅を下りて上がる時にスロープが 1 個ありますが、駅の中もそんなにエスカレーターがあるわけじゃないし、バリアフリーということだとして、25 年前の花博の時、あれで許してもらったんだなあと。ものすごく感慨深い印象がし

ました。あと、壁画とか、鶴見緑地の駅を上がってきて振り返った時に、「水の館」と向こう側に「いのちの塔」が見える。あのへんの景観は花博の時からあまり変わってないので、非常に懐かしいなあと。中へ入るとたぶん大分変わっていると思いますが、外側から見る限りは昔のままだなという感じがして、大変感慨深いものがありました。

■ 「緑の 3 倍増計画」

配布資料の方にメモだけ書いてありますけれども、私のいただいたお題は、政府関係の経緯はどんなことだったのかということですので、1 ページ目にはどんな格好で開催が決まったかということを書いてございます。宮崎さんから大阪市の動きがありましたが、我々の方で言いますと、当時、建設省公園緑地課で全国の公園をつくっていたわけですが、緑化についてはこれからというところだったわけです。

ちょうど中曽根内閣が発足しまして、こ



松本氏の講演の様子

の当時、木部建設大臣だったんですけども、中曽根さんが緑についてやりたがっているのでいいアイデアはないかということがございました。皆さんご存じないかもしれませんが、毎年10月に都市緑化月間というのがありまして、銀座のソニービルのところで苗木を配ったり、というふうなことを毎年やっていたんですが、その時に中曽根総理大臣がソニービルに行くので、そこに立って演説できるいい内容を考えろ、みたいなことがありました。その時に「緑の3倍増計画」、要するに全国の緑を3倍にしましょうというのを総理へ持っていったわけです。最初は実は2倍だったんですけど、2倍じゃ総理大臣はないだろうと言うので、じゃ3倍ですと。これは決める時にはいろんな省庁と調整をしなくちゃいけないので、当時の大蔵省に持っていくと、「お金もないのにこんなことできないだろう」と言われて、「おまえら、あとで恥かくぞ」と「緑のさんざん計画」と言われましたけれども、とにかく中曽根総理は、銀座のソニービルで緑を3倍にするぞと。3倍の目標は20万本だったと思いますけど、20万本の木を植えて緑を3倍にするぞということがございました。この計画の中に、花と緑の国際博覧会を大阪でやるというのがありまして、大阪市の計画に建設省が飛びついて、国際博覧会をやるということで、この計画の中に盛り込んだということでございます。

■ AIPH（国際園芸家協会）への加盟

もともと大阪市は、AIPH（国際園芸家協会）と話をしている、A1クラスの博覧会をやりたいと。国際大博覧会というジャンルだったんですが、そのためには誰かが会員

にならないとできないということがありました。国の行政は縦割りですので、建設省か農水省かみたいな話が当然ありまして、大阪市は建設省にも来ていましたけれども、農水省のほうにも行ってました。鶴見緑地でやりたいということなので、公園でやるので建設省に来ていて、園芸博覧会をやるという意味では、園芸家協会はどちらかというと花とか園芸の方たちの団体で、加盟した造園建設業協会はトンカチやるところで、花をつくっているところじゃないので、農水省の園芸団体が入られるのが本流だと思うんですけど、そういうことがあって大阪市は、加盟という意味では農水省に行かれたんだと思います。

ただ、建設省はトンカチというか、ようするに実行力、行動力があるので、何かやろうと思ったらさっさと行っちゃうところがあるので、農水省よりは建設省のほうがすばしこいということがあるものですから、大阪市が農水省に園芸家協会加盟の話をしていると、ぐずぐずしてなかなかうまく前に行かないので、じゃあというので我々が造園建設業協会に、「とりあえずAIPHに行って加盟申請しろ。資格がないよと言われてたらしょうがないけど、とにかく行ってみて、加盟できたらそれでいいじゃない」みたいなことだったんです。どちらかというと建設業協会のほうが組織としてはしっかりしていて、園芸のほうは割と大きなところと小さいところとあって、協会としてのまとまりがなかったということもあったと思いますけれども、建設業協会がAIPHに加盟ができて、同時にA1の開催承認ももらってきた。

建設業協会は、建設省の外郭団体という

ことがあって、基本的にはこのへんから建設省が主導をとって国際博覧会をやるという話になったということでございます。当時は、今、ヨルダンで頑張っておられる中山外務副大臣のお父さんの中山正暉先生とか原田憲先生とか、大阪は非常に偉い先生がたくさんいらっしゃったので、全国から園芸博覧会をやるという声がありましたけど、結果的に大阪の先生の力とか、あるいは大阪市がいろいろと先に勉強されていたということがあったので、大阪の鶴見緑地ということで決まりました。

■ BIE（国際博覧会協会）総会での承認

配布資料の3番目にありますけれども、政府ベースでは博覧会条約に基づいて国が加盟している BIE（国際博覧会協会）に申請しなくちゃいけないということがあって、閣議了解は 1985 年 9 月にやりました。誰が主幹大臣になるかということがありまして、AIPH に加盟しているのは建設省の団体だということもありましたけれども、いろんな手続等々を建設省が率先してやらせてもらったということもあって、担当大臣は建設大臣となりました。農水大臣は両省協力してちゃんとやりなさいよというような閣議了解を 9 月にすることができました。余談ですが、我々建設省の公園の先輩に塩島大さんという人がいまして、1 年前に衆議院選挙に出るといって出て当選して、1 年たってちょうどこのころ、体を悪くして危篤になって、その塩島大さんが亡くなる寸前ぐらいに中山正暉先生から電話が来て、あした閣議了解するぞ、おまえら準備しろという話になって、塩島大さんが亡くなると同時にこの博覧会の閣議了解ができた。

そういう意味では大変感慨深いというか、非常に劇的な形で、しかも「担当大臣は建設大臣にしたぞ」と正暉先生から言っていたいて、非常に思い出のある閣議了解です。

その後、配布資料の 4 番目にありますけれども、その年の 12 月に BIE の総会がありまして、花博が承認された。その事前の 6 月に、BIE 総会での一般規則とか特別規則の承認があるんですけど、要するにこの花の万博をやるに当たって、こういう規則で博覧会をやりますよとか、外国から出展していただく時にどういう出展の形態で出してくださいねというような規則を先につくって、それを承認してもらわなくちゃいけないわけですけども、花の万博を日本でやったことがありません。海洋博覧会とかいろんな博覧会はやっていますが、園芸博覧会はやったことがなくて、どういう規則をつくらばいいのか、実は誰もわかりませんでした。

■ 事業計画と資金計画の決定

これも大阪市が非常に先行しておられたので、先ほどお話があったフロリアードとか、直前にはイギリスのリバプールで園芸博覧会があって、そのへんの一般規則や特別規則を手に入れておられましたので、それをいただいて、若干日本型に直しましたが、ほとんど丸写しで、内容はわからないけど、まあこれでいいだろうというので BIE へ持って行って、一般規則を審査してもらったんです。当時の在フランス日本大使館の参事官、外務省、農水省の担当と 4 人で一般規則の委員会に乗り込んで行って、説明をして、これで承認しろという話だったんですが、なかなかそこは厳しくて、いろんな

ことを質問するんですけれども、基本は全部向こうの言うとおりに直す。こっちもよくわかっていないので、向こうが「これはこうじゃないか」と言ったら、全部そのとおり「はい、直します」ということで、ともかく全部向こうの言うとおりに直しました。結果的に細かい修正が多く指摘されて、ともかく一般規則についても何とかクリアして、12月に正式に登録がされたということがあります。その結果を踏まえて、翌年の2月に、博覧会のための協会が設立されたということになっております。

あとは、それに基づいて法律ができたり、あるいは配布資料の7番にあります、関連公共事業の計画ができたりということで、鶴見緑地をつくりますよとか、国道をつくりますよというような関連事業、当時のお金で1,900億円という事業計画を決定し、8番目に、博覧会にどれぐらいお金をかけますかということがありまして、1988年1月に建設費が360億円、ほかに既定の公園整備、鶴見緑地はもともと公園ですので、将来計画に基づいてつくる分ということで120億円、全体で480億円の建設費ということになりました。それから、運営費が422億円ということで、これは基本的にほとんど入場料で賄いますという前提です。先ほど宮崎さんからお話がありましたけど、入場者を何人にするかというのが非常に問題でして、この時には2,000万人、筑波博とほとんど同じですが、2,000万人入場者が来れば全部間に合いますよということ。例えば1,000万人にすると、この半分ですので200億円しかお金が使えないということになりますので、科技博とほとんど同じ内容で、422億円を運営費に使いますというよ

うな計画ができ上がりました。

1988年はそんなに景気がいい時ではなくて、博覧会があった1990年になるとだんだん景気がよくなってきたバブルの初めのころで、結構民間の方からもいろんなお金がもらえたわけです。例えば、海外から外国庭園に出展しますよと言うんですけれども、ただお金はないよという話がたくさんあって、協会でお金を用意するから来てくれと。宮崎さんが言ったように、図面を送ってくればこっちでつくっておくよ、みたいな話がたくさんあったわけです。外国庭園の建設のために、いろんな企業に外国庭園にお金を寄附してくださいということで回ると、結構お金をくれたんですね。

私が担当したのは、例えば中国庭園は大塚製薬さんがお金を5,000万円ぐらいくれたんです。余談ですけど、5,000万円くれたので中国庭園をつくってくれと中国に言ったら、円ベースは嫌だ、ドルベースで金をくれと言われて、その当時、140円ぐらいのレートだったと思いますけど、いいですよということで、5,000万円を140円で割って何十万ドルですねと協議して帰ってくると、当時の協会の財務部長さんが、「おまえ、ドルベースでやって責任とれるのか。円高になった時、10円違うと相当違うじゃないか」と問題になったんです。「その時は何とかします」とか言ったんですが、大塚製薬さんは大変優しい会社でして、そのぐらいをドルベースであげますよと言っていた。いろんな企業を回って、当時は、不動産バブルでしたけれども、新興の不動産屋さんに行くと、1,000万円ぐらいすぐがいいよというように、結構お金はあったんです。

■ 会場計画決定までの経緯

このあたりまでは、建設省で仕事をしていたんですけども、このあと博覧会協会に出向してやれと言われて、博覧会協会に移ってきました。その次のページ(配布資料P7)が私の携わった会場計画とか開催中の話です。1と2の会場計画のあたりは、私がまだ建設省にいたころに協会がやった仕事でございます。この中で会場計画あるいは会場基本計画とかいろいろやったんですけども、委員会がありまして、1つは、「自然と人の共生」みたいなことで、「共生」という言葉が出てきました。当時、国際関係では、東西対立があったので米ソ共存とか、「共存」という言葉は結構使われたんですけど、「共生」という言葉はほとんど使われていなかったんですが、私の上司で非常に直球しか投げないという、ぶれない人がいたんですけども、その人が「共存」という言葉はこの際だめだ、「共生」という言葉を使うべきだと言いました。要するに敵対するものが一緒に存在するのが「共存」で、もともと一緒にあるべき人たちが一緒に暮らすのは「共生」と言うんだと。したがって、アメリカとソビエトは共存しているんだ、人間と自然は共生しているんだということで、「共生」という言葉が正しいと、「共生」という言葉に全部直されました。

それから、今までの博覧会というのは、博覧会屋さんというか、博覧会に非常に慣れていらっしゃる方が日本万博以来いろいろいらした。プロデューサーとかいろいろなことで、もちろん人の捌きとか、どういうふうに管理していくとか、警備をどうするとか、会場の運営をどうするかというのは慣れていらっしゃるから、当然そういう方が

いらっしゃるわけですけども、私たち特に建設省の立場でいうと、この博覧会を機会にして、公園とか緑についてどんどん展開していく、いろんな物事が動くきっかけになればいいなということがありましたので、やっぱり花と緑みたいなことが中心に座っていないといけないということがありました。

会場計画ですと、委員会の人たちの主要なところが建築の方とか今まで博覧会をやった方が多かったわけですけども、そういう方たちの基本計画、あるいは議論の中にどうやって緑とか花を主体にしていくのかということがありまして、先ほど申し上げた私の上司の直球一直線のぶれない方が、その会場計画委員会に乗り込みまして、今までの会場計画は全部だめだ。会場が全部花と緑でいくような屋外型で、パビリオンはもちろんあってもいいんだけど、それは主体ではない。そこで博覧会のテーマを展開するのではなくて、会場全体でやるんだというような大演説をぶちかまして、計画委員会はしら一っとして、「じゃ、おまえら、好きにやれ。やれるもんならやってみろ」みたいなことで皆さんお帰りになってしまって、あとで何かぼつんと我々だけ残っちゃったみたいなことで、そんな頑張らなくてもいいのにな、と僕なんかは思ったんですけど結果的にはその人がいたおかげで博覧会がきちんとできて、花とか緑についてのことが非常にうまくいったんだと思いますが、そんなこともありながら計画ができて上がりました。

その計画をつくる時にも、今までの博覧会に慣れたコンサルタントさんとかいろいろいらっしゃるわけですけども、そう

いう人たちが中心になってくると、いわゆる花とか緑がどうしても端っこになってしまうということがありましたので、私のあとに大塚さんが話されますけれども、造園の技術者、コンサルタントの方に仕事をもらうのが筋ではないかなということでやりました。

失礼ながらその当時、造園コンサルタントって、公園のすべり台とかブランコとか、そういうのを設計している人たちでしょうぐらいの認識しかあまりなかった。我々はもちろんよく知っていますけれども、先ほど宮崎さんが、組織の中で緑屋さんがどれぐらいいるかという表を示しましたが、それ以外の人、公園というのはそのへんにある児童公園、ブランコがあったり、ということでしょうみたいなことなので、そんなちまちましたものを設計している人たちにこんな 100ヘクタールを超えるような博覧会の設計なんかできるわけがないでしょうみたいなことがあったんです。それを何とかコンサルタントの皆さんにやっていただきたいということで、いろんなことがあったんですけど、残念ながら協会の中にと、それから私のこういう性格ですので、「まあ、いいじゃないですか。仕事ができればいいんでしょ」みたいなことでふわっとやったので、なかなかうまくやれなくて申し訳なかったんです。今どういう認識になっているかは別にして、造園コンサルタントのある大立者がいて、それが総合プロデューサーとして博覧会ができ上がったというような認識にはなかなか出来なかった。これは反省材料というか、力不足で申し訳ないなと今になって思っていることです。

それから、いろいろ仕事をやってもらっていて、会場計画を見ていただくと、パビリオンのあるほうは割と格子状になっているとか、碁盤の目になっているのがおわかりになると思います。コンサルタント協会の皆さんとわーわー言って、よし、これでいこうといった時は、本当は池に向かって放射線状に園路を入れよう。「どこを歩いている、あるところに行くとも必ず池が見えるので、自分のいる場所がわかるようなのがいいね」「すばらしい、やろう」と言って決めたんですが、会場計画を決めるずっと前に出展部というところが、碁盤目に切ったやつで各企業にパビリオンを地割りして土地を売っていた。我々は知らなかったんですけど。

従って、碁盤目を崩して放射線状にやると、俺のところの土地が悪いところになるとか、出展の人たち、民間のパビリオンの人たちに総スカンを食らいまして、あっという間に方針が変わりました。大塚さんのところに林さんという人がいたんですけど、林さんと「変わってもいいじゃないか」ということで、次の日、大塚さんに言ったら、あとで林さんが大塚さんに「おまえら、何の信条もないのか」とすごく怒られたというんですけど、あれは林さんのせいではなくて私のせいでありました。残念ながらできなかったこともあるんですけど、とりあえず会場計画ができ上がって始まりました。

この中で、さすが造園だねという格好で一つあったのは、皆さん、花博の時に最もすばらしいと思われたと思いますけど、大池の南側に「花の谷」という花がいっぱいのやつがありました。あの花の使い方、花壇にチューリップを植えているのはよくご存じだ

と思いますけど、全体として花を立体的に景色として見せるというのは日本ではあまりなかったと思います。そういう見せ方は、あそこがある種、秀眉だったんじゃないかなという感じがします。きょう、来られてないので残念ですが、鷺尾さんという方が最初に宿根草の使い方みたいなのを我々に説教されました。「花舞台」から「花の谷」のところの花の見せ方がこれまでのやり方とは全然違ったので、なるほど、こういうこともあるのかなということで非常に評価があった。

それから、街のエリアのストリートのところにも池があって、日除けにいろんな旗みたいなのを使ったりしました。あれは大塚さんのアイデアですけど、道の中にいろんな小物でアクセントをつけたり、縁台みたいなのを置いていくという、日本的な非常に細かい装置をつけた。今までの万博ですと、道は通るものという前提ですので、あまり余計なものを置かない。危なくてしょうがないから余計なものを置かないというのが普通なんですけれども、そこは花の博覧会、花の万博ということがあったので、木を植えてみたり、いろんな装置で賑わいを創出し、景観をつくったというところがあったと思います。それから、花のバスケットとか、お皿に乗つけた花がたくさん会場の中にありました。ああいう花の新しい見せ方とか置き方が全体にたくさんあったので、そのへんもでき上がってみれば、なるほど、造園の連中がちゃんとやってるな、という評価があったような気がします。

あとは、大阪市の公園なので、480 億円あるいは 360 億円という建設費なんですけど、当然、やっているうちに足りなくなるので、

大阪市の公園事業ということで、例えば外国庭園なんかも、一部は、終わってから公園として残すんだということで、国の補助金を使って公園事業としてやらせてもらったということがあって、480 億円では足りなくなって、いろんな格好で大阪市とか大阪府にお金を出してもらった。その時に、先ほど宮崎さんから博覧会の前の鶴見緑地の写真がありましたけど、いろんなところをどんどん削りました。削りましたと言うと変ですけど。この国際展示館もそうなんですけど、これはもともと計画にはなくて、最後のほうになってから松下記念財団がここに何か記念になるものをつくりたいと言って、20 億円か 30 億円出すと言っているんですけど、どこかにこういうのをつくれと言われて、当時、私、計画課長をしていて、「ここしか空いてないからここにやりましょう」とか言って四角く描いて、大阪市に持って行って、「ここ、すみません、山を削ってこういうのを建てます」。最初木を切る時も、せっかくごみの山から何十年もかかってここまでやったのを、おまえら切るのかと相当叱られたんですけども、最後のほうはほとんど諦めていただいたので、「ここ切ります」と言ったら「はあ、どうぞ」みたいなことだったんです。そういう意味でいうと、大阪市の公園の担当者の方とか、本当いうと大阪市民の皆さんだと思んですけど、大阪の皆さんには随分迷惑をかけてこの博覧会が成功したんだろうと思います。

■ 開催期間中の経緯

期間中の思い出話みたいなことですがけれども、私は計画建設部というところにおいて、宮崎さんと一緒に建設をやって、開幕の時

には企画調整部で全体の調整をさせていた
だきました。その中で事件・事故でいうと、
ウォーターライドとか、あるいはロープウ
ェイから滑車が落ちたとか、マジカルクロ
スって左の上のほうに遊園地がありました
けど、そこの風神雷神というジェットコー
スターみたいなものの車輪がどこかに飛ん
でいっちゃったというような事故がたくさ
んありました。あるいは台風が来たことも
ありました。

ウォーターライドは、開園2日目に船が
落っこちた。みんな、船が空から落っこちた
とびっくりしたんですけれども、ああいう
のがあると、今だとたぶん中止で、もうその
後開けなかったと思いますが、あれでも一
日も休んでないんですね。博覧会は一日の
休止もなくやりました。台風の時も3時ご
ろに閉園したんですけれども、次の日から
また始めました。

ということで、いろんな事件・事故があっ
た割には、一度も中止することはなかった。
これも田中さんという偉い人がいて、この
人もまた乱暴な人なので、やめないって言
ったらやめないみたいな、そういう人がい
て、ともかくこれはこういうふうにやるん
だという方針を決めて、それに従ってやる。
そういう意味で、組織というよりは人がち
ゃんといたということだと思います。こう
いう博覧会をやる時は、組織よりは人がい
たほうがいいのだらうと思います。そうい
う意味で人に恵まれたところもあって、休
まずにやることができたと思います。

それから、猛暑とか豪雨とかたくさんあ
って、これも宮崎部長は施設管理部長で苦
労されましたけど、この時はものすごく大
雨が降ったんですね。それと、鶴見緑地って

割と谷みたいなどころがあるので、谷のと
ころの下水、雨水がばーっと噴き出して噴
水のようになるということがあったり、花
の万博なので、木で舗装しているところの
木がぶかぶか浮いちゃうとか、いろんなこ
とがあったんですけれども、そういうこと
も何とか切り抜けていただいて、猛暑の時
には雪を降らしたり。「雪降らせろ」と言っ
て、「雪なんか降らせられないでしょう」、
「考えろ」と言われて、氷を砕いて人工雪。
今みたいにきれいにはならないですけど。
じゃ、氷を買わなくちゃいけないというん
で、大阪の氷業者さんの協会に聞いたら、だ
めだ、花博に1日200本も出せるわけがな
いと断られて、鳥取県の漁船に氷を渡す人
がいるんですね。どこの人が忘れましてけ
ど、鳥取県から毎日、4トントラックに氷を
200本積んできてもらって、会場の中に氷
柱とか氷を配るというようなこともやりま
した。それから、栈敷をつくってみたいり、い
ろんな格好で対応しましたけど、それも決
断力のある人がいて、その人がうまく仕切
ってくれたと思います。

■ 花と緑の万博の成果とは何か

最後に、「花の万博の成果とは何か」と書
きました。これはあとでシンポジウムのテ
ーマにあるようですけど、基本的にいうと、
何だかんだ言っても、やっぱり花博が終わ
ってから街の中に花が増えたりしたのは事
実だと思いますね。花があると楽しくなる
んだと。ここに来られた方は当然ですが、全
国的に見ても、やっぱり花を街の中に置く
とかいうことが花博を契機にあったんじゃ
ないかなど。そこは自負してもいいだらう
と思います。それからいろんな技術、先ほど

言ったバスケットとか大きな皿の上に花を置くとかいう花の見せ方も、この博覧会を契機にして随分進んだんじゃないかなと思います。今現在もいろんな形でさらにそれが増えて、屋上緑化とかいろんなことに発展していますけれども、いずれにしても花の万博というのは、もちろんいろんな評価があると思いますけど、花の普及、街の中に花を持ち込むとか、生活の中に花を持ち込む、ご仏前の花ではなくて花を持ち込むという意味では、非常に成果があったというか、きっかけになった博覧会ではないかなということで、そこだけは十分自慢してもいいんじゃないかなと思います。

講演③

「大阪花博の会場計画」

大塚 守康氏（ヘッズ取締役会長）

私の役目は、今、お二方がいろいろご苦労されていた、それまでの用意とか段取りといったものを絵にしていって、現場の絵に仕上げていく役割です。先ほどの松本さんのお話にもございましたけれども、ランドスケープコンサルタンツ協会という社団法人の組合の会員が一同となって、さらにその中から関西支部の方たちが最終的には実力を示して、花博会場を成し上げたというような経緯であります。その中で私は、現場の旗振りをさせていただいたということになります。

■ 会場計画の過程

これは、先ほど来、松本さん、宮崎さんの中にも出てまいりました花博会場の計画図です。こんなに美しい、あるいは結構複雑な絵が一朝一夕でできたわけではないので、それに対する段階を私のほうからお話しさせていただき、先ほど司会からありました花の写真などについても皆さんに見ていただこうと思います。

絵に入る前に、これは宮崎さんも松本さんもお話しされておりましたが、花博の理

念という非常に大事なものがあります。かつて私が絵を描くほうで、松本さんがいろいろと文章をまとめられるあたりで、「大塚さん、絵は変わってもいいんだけど、文章は変わらないよ」と言われた時がありました。まさにそのとおりで、花博の理念というのは、国がやることであり、世界が相手でございますので、今、何で花博なのか、それが今の社会にどういういい影響を及ぼすのか、あるいは未来に対して花・緑という博覧会をやるということがどういう展開をしていくのか、そのあたりを非常に格調高くうたい上げる必要があります。それによって松下財団も金を出す気になるし、世界の国々も、それではうちの庭園も出してみようかという気になるわけで、そのへんが一番大事なところかと思えます。どんな格調高い文章がうたわれたかというのは、皆さんのお手元の12ページに収録されておりますので、いずれお目を通していただければと思います。

では、絵のほう、次に入ります。これは、今の絵を具体化してでき上がった航空写真です。かなり複雑なんですけど、その次、お願



大塚氏の講演の様子



会場全景

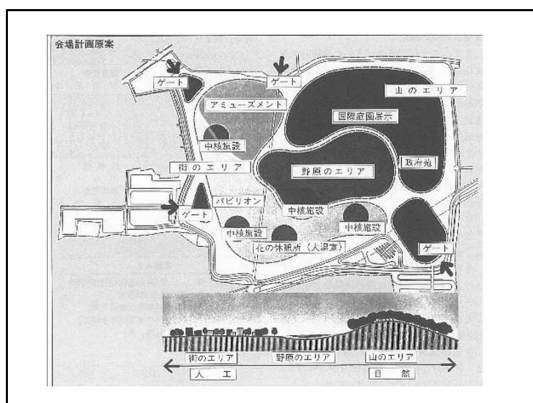
いします。一遍に図が単純になりました。これは、あれだけ複雑な中身の濃い会場計画が、どういうところからスタートしたかという図であります（左下図）。お二方からもゾーニングというようなお話がありましたが、山のエリア、大池を中心とした野原のエリア、それと今、大温室などが建っている平たい街のエリア、この3つのゾーンを基本として会場計画をしますよというのが、まず発端です。後ほど失敗例などもお話しさせていただきますが、我々ワーキングが最初からこういう形で独断で走っていたわけではありません。非常にベテランの偉い先生方、都市計画、建築、当然ながら造園の先生もお入りになってらっしゃいましたが、その方たちの会場計画委員会、なかなか権威のある、あるいは非常にうるさい委員会です。そこに対してお伺いを立てながら進めなければならないということで、まずはスタートさせていただいたものです。

ただ、これは非常に単純だといいいながら、まず山、野原、街というエリアの区分が非常に普遍的であること、それから一般に非常にわかりやすい。そのへんについては非常にうまいエリアだなどと思います。それともう1つ、大阪市さんが長年営々と築かれて

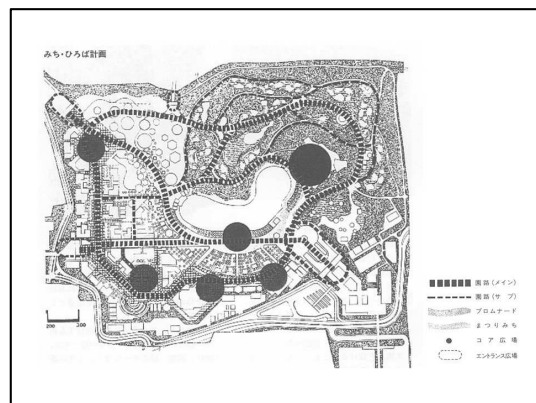
いた鶴見緑地の基本が、山にしても池にしても造成平坦地にしても壊されていない。基本的にはその基盤をそのまま受け継いでいる。この下に断面があります。

もう1つは、ゾーニングの段階から、花博として将来どんなものが出てくるかというのは大体予想がつかます。まず国際庭園は、もうちょっと具体的に言ってみれば、丘陵地の良好な住宅に庭がいっぱいあるようなイメージかなとか、野原のエリアというのは、花がいっぱいでどのかで、それでいてイベントが開催しやすいようなところ。街のエリアというのは、当然ながらパビリオンが並び建つところ。そういったものの予測値が矛盾なく話のできるエリアニングだと思います。そのへんで、一見単純に見えるゾーニングが以後のスタートになったということは、これから展開していく上で非常によかったかと思われます。この単純明快なゾーニングに対して、ちょっと我々のほうは勇み足で独自の絵を描き出しちゃったというところがありますが、後ほどまたご覧にいきます。

これは、今のゾーニングに対して会場でどういう主動線を設定するか、あるいは当初からメニューに上がっている大型施設、



会場計画原案



みち・ひろば計画

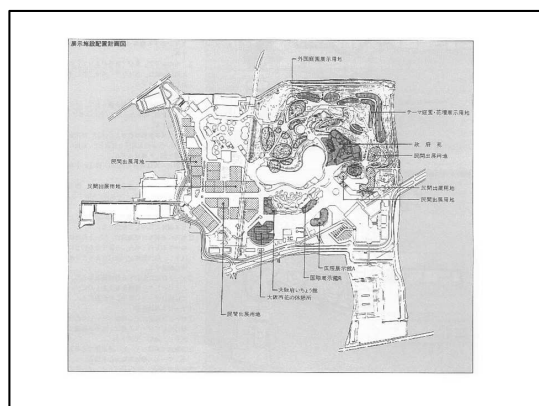
例えば国の出展する政府苑ですとか、あるいは催事会場とか、ある意味でのシンボルの大温室とか、そういったものをこの構成の中で位置づけてあげる（前頁右下図）。これは皆さんもよくお聞きになられるかと思いますが、こういう広い会場では主動線は一筆書きで書けるのが一番いいよというのが、都市計画、そのほかベテランの先生たちのご指示でした。

それから、こういった諸施設の位置の確定も非常に大事なことでした。といいますのは、1つの組織が常に全体的にものを進めるというのではなしに、各種の事業がたくさん集まって1つの博覧会を成しております。例えばこの政府苑ですが、こういった道の造成や庭の造成とは別部隊の、政府苑の計画や予算取りや展示内容を決める部隊が、この位置を会場計画で決めてあげることによって、独自に進めることができるわけです。それぞれの主要施設の丸においては、全部同じように別部隊がスタートし始めます。

こういったことについて、先ほども松本さんのお話でありましたが、実はランドスケープコンサルタンツ協会全員とは言いませんが、そのほとんどが、こういう大きなエリアの構成図、都市計画的な作業をするということは経験がなかったんです。今までも博覧会にはたくさん参加しているよという経歴はあるんですが、どんな参加の仕方かという、例えばここに日本庭園があります。日本庭園は、当然ながら都市計画屋さんの仕事でなしに造園、ランドスケープの仕事になります。位置決めをしてもらった上で、そこを公園化する、あるいはパビリオンの庭をつくる、そういう局部的な次の段

階の仕事は、皆さん、たくさんされておりましたが、それを1つのこういう大きさに組み上げるといのは経験がありません。諸先生から、花や緑だから造園屋がやるのはいいけれども、やれるものならやってみなさいと。まさに我々は、諸先生の部下の方たち、実際に現場で動かされた、科技博や沖縄博や横浜博をやられた方たちに丁寧にご指導を受けながら、会場計画をつくってきました。その丁寧にご指導を受ける内容は、結構針のむしろで、「そんなものもわかってないでよくやるね」みたいなことで、かなり汗をかいたような経緯があります。

これはちょっと図がわかりにくいですが、今の図からさらに土地分譲に移っている図面です（下図）。松本さんがおっしゃっていたそれぞれのパビリオンへの土地の売買といいますか、使っていいよという権利、そういったものの区分が街のエリアでは各企業へのパビリオンの割り付けとして出てきています。それから、山のエリアについては、外国庭園がどれだけの数、どういう形で見えてくるか、それを園路なんかから見える形、あるいは池の反対側から見える景色。中国庭園という話題がありましたが、ちょうどここにありまして、池の縁の非常にいい



展示施設配置計画図

アクセントになっています。それから、山のエリアのこちらのほうにつきましては、民間の企業、団体などの庭園が張りつかれるという大きなゾーンにおいて、それぞれゾーンだけでなしに土地の大きさ、あるいは隣が便所であるのか売店であるのかといったそれぞれの個性まで、マイナス点のないような形で全部配置してきております。先ほど都市計画と言いましたけれども、博覧会というのは、ある種、土地の分譲プランだとも言えます。というのは、博覧会がすべて公的なお金で行われるわけでなしに、それぞれのパビリオン、それぞれの庭園が、それぞれ使えるお金でもって、あるいは企業が持ち込んできたお金でもって、どれだけ賑やかな、あるいは華やいだものをつくって、花博という理念に従ってテーマを展開していただけるか。それが、博覧会全体がどう賑わうかということにつながってくるわけです。

博覧会というのは、決して一個人、一団体の計画で済ませない。例えばゲートが4カ所か5カ所ぐらいありまして、メインゲート、西のゲート、守口からのゲート、北のゲートとあるんですね。あまり大きくない博覧会や緑化フェアだと、1つの建築屋さんに全部やらしてもらっちゃうのが一番手っ取り早い。でもそれだと、その建築屋さんが連れてくるお客さんにしてもその関係者にしても限度がある。それをたくさんの建築部隊に分散してやっていただければ、その方たちの背後にあるお客さんの可能性のある方たちが、皆さん、この博覧会を非常に気にしていただいて、遊びに来ていただける。また、言葉は悪いんですが、そういう意味では、ある種ごった煮のほうが博覧会は賑わ

います。

もう1つ、余談でおもしろいのは、ランドスケープのほうは、この博覧会を仮設ということ、あとは公園に戻すんだということのを頭に置きながらデザインしてまいりましたけれども、建築屋さんは、結構計画では偉そうなことを言うんだけど、仮設というものの概念がわからない。本設だか仮設だか、その当時は仕分けがなかったんです。もうちょっとさかのぼって言うと、私、この歳ですから70年の千里万博にも多少首を突っ込んでいたんですが、あの当時のパビリオンというのは、お金もたくさんあったというか、コンクリートの本建築ばかりでした。それをあとでどう片づけるかという時に、旭化成さんが、コンクリートの中にダイナマイトを仕込む穴をあけておきなさいよ、そこで火をつければ、一遍にドサッと崩れるよというような話も出るほどに、博覧会だと言いながらも仮設という感覚があまりなかったというのが私の一つの発見でした。

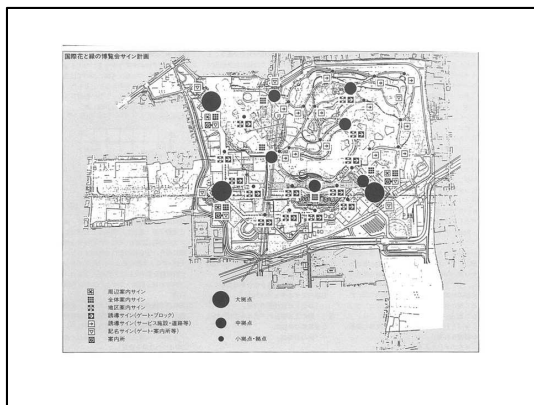
これはごちゃごちゃした絵ですけれども、博覧会をそれぞれ事業化して成り立たせるというものに対しては、デザインを超して非常に大事な絵だということが、当時よりも今だと認識ができます。

これ(次頁左下図)は、さらに細かく、ちょっと見にくくて恐縮なんですけど、広場が大きいのか、小さいのか、そこにどれだけの飲食が張りつくのか、そのまわりのトイレなんかにはどのぐらいのブースがあるのか。先ほど話として飛ばしちゃったんですけれども、博覧会の理念が大事だよという次に、博覧会の枠組みがこういう計画の一番ベースになります。大まかに言うと、2,000万人来場者を予定して、4月から9月まで半年間

にわたって開催するといった時に、どのぐらいのトイレが要るのか、あるいは飲食はどのぐらい成り立つのか。その前の筑波とかいろいろな博覧会では、意外にそのあたりの対応がうまくいきませんで、たくさんお客さんが来るよと言いながらも、物販がたくさん出ていただいたあとで、お客さんが実際には来なかったというので、訴訟問題になったりしていたことがありました。

そういう意味では、博覧会が通産省型の産業博覧会型から、これは花博だけではなくかもしれないが、花・緑博というような、気持ちのゆとりというか、そういったものへ移行したことによって、問題も解決したのではないかと考えております。

それで、通してこういうような総括をして絵になりました。先ほど松本さんのおっしゃっていた池の見える道路は、幾らかまだ痕跡を残しておりますが、ほぼこれで基本的な区分が終わりまして、政府苑は政府苑で独自の事業、アミューズメントはアミューズメントでもって独自の事業、それぞれのパビリオンはそれぞれの企業による具体化、それから大温室構想、それと先ほどおっしゃっていた陳列館のことなどがスタートするわけです。



サイン計画図

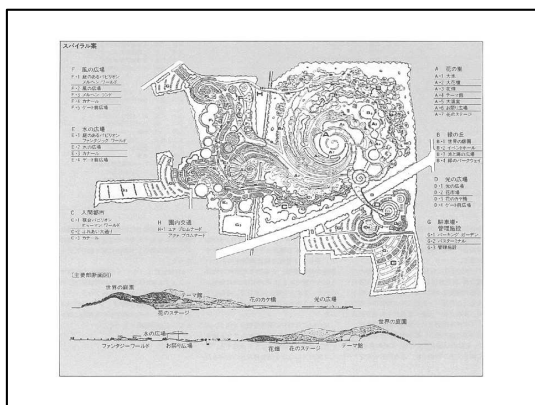
博覧会のもう一つの大変なところは、通常、公園の設計ですと、こういう基本設計ができれば、即これからは実施設計、施工図の話になります。ところが博覧会というのは、会期寸前まで、「私のこれを出展したいんだけど」とか、あるプロデューサーがここをぜひ使いたいというようなことを、雑駁に言えばねじ込んでまいります。先ほど宮崎さんのほうで、こういう動線に対してプロデューサーがあとからいろんなものを突っ込んでくるから、会場は本当に苦労したよと。まさにそのとおりなんですけれども、プロデューサーというのは、ある意味、こういうものの指導をすると同時に、お金を持ってきてくれて賑わしてくれる人。だとすると、ただ文言だけで指導する学校の先生みたいな立場じゃなくて、現実こういうところに空きがあったらフォーリーという企画を持ち込みましょうか、それでどれだけの世界の人たちを呼んでこられるかとか、あるいはお金をどれだけ動かせるか、それが極端に言うと開催してからでも出てきます。そのつど、そういったものへの柔軟な対応をしながら、博覧会の構想というのができ上がるわけです。

これは失敗例というか、最初は我々、博覧会が何たるかということがあまり理解できずに、自分の夢を描ける作品だというようなつもりがかなりあって、文言としては、花・緑というのは生き物の博覧会であるから、生き物というのは螺旋が基本だ。スパイラル。その螺旋を象徴したような会場計画をつくって、それを生命博の象徴としようというようなデザインの意気込みがあって、これは造園部隊、ランドスケープ部隊が独自に描いた絵です（次頁左下上段）。かなり

これへの入れ込みが強くて、それと先ほどの会場計画委員会の、事業としてどう進めていくか、早く出展の敷地を決めて次の事業に移らせていこうよというようなものが、真正面からぶつかっちゃったわけです。

先ほどのをちょっと思い出していただきたいのですが、山、野原、街という非常にわかりやすい、普遍性がある、それから次の展開への糸口もそこから見えてくるというものに対して、「生命はスパイラルだ」というのはかなり抽象的な文言になりますね。博覧会がやるべき土地利用とどうかかわり合ってくるかというのにもつながりがよく見えない。そうするとやはりこれは1つの夢というか、サイドプランであって、没になってしまっているわけです。

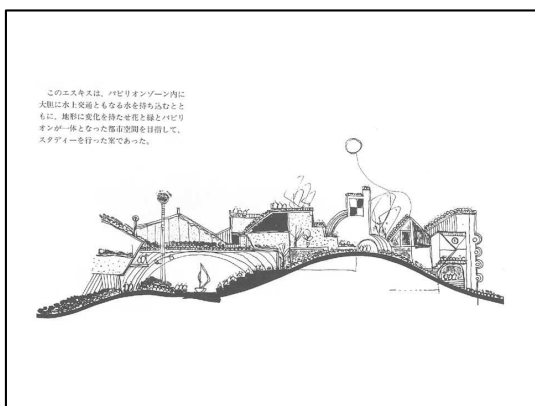
こんなまで描いちゃっております（左下図下段）。こういうところに水路を流して船を浮かべて、その上に橋のようなパビリオンを乗せようとか、さまざまな夢を語っているわけですが、要は社会的にちゃんと定着するプランなのか、それとも夢の語りなのか。ランドスケープという1つの枠組みというのは、非常に小さな庭園や公園から、こういった社会的に重みを持った計画までさまざまありますけれども、社会的に大きな重みを持つほどに自分勝手な作業は通らないわけです。絵の裏に文言があって、それをどう解きほぐしていった定着させるかというのが、まさに博覧会計画の神髄かと思われます。ちょっとこのへんまでは口幅ったいことで大変恐縮ですが、次からいよいよお花に行きます。



JLCAによるスパイラル案

■ 会場デザインの展開

その前にへんな絵が出てまいりました。これはバリ島の棚田と、田んぼの神様を祭る彼らの飾りです（下図）。我々の年齢ぐらいたとよく覚えているんですけども、田舎へ行って水田で田植えをした時に、縄とか葉っぱでいろいろ飾り物をつくったり、お盆にはこのへんにも花を立てたり、自然



JLCAによるパビリオンゾーン案



会場計画のイメージ（バリ島の棚田）

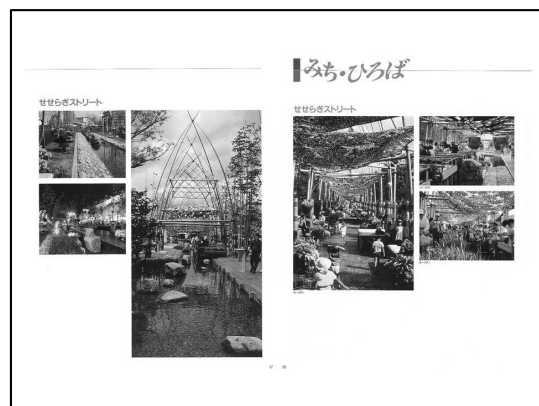
材料でもってその場に働きかけて特別な意味を持たせるということがたくさんありました。通常、博覧会というと、未来を見せるというような趣向が通産省型では強く、最新型の器材、例えばプラスチックとかステンレスといったものでベンチをつくるとか、非常に緊張度の高いテントでもってパビリオンや日除けをつくる。日本ではたくさん博覧会をやってきたために、そういったのが1つの博覧会トーンとして自分たちの中に入れてきちゃっていたという気がします。それだけに、逆にそれに対する新鮮さも薄らいでいったのではないのでしょうか。

そこで、今までの針のむしろのつらい計画でなしに、ここからが造園屋が楽しむところだよという話なんですけど、ここでもいろいろストップをかけられながらも、無理やりやってしまった。1つは、花・緑博というのはヨーロッパが中心で開催されてきましたけれども、大阪でやるのはアジアで初めての国際花博でした。それから、花・緑博というのは、単に花・緑じゃなくて生命を謳歌する博覧会だということ。日本あるいは大阪の位置するモンスーンアジアには、こういった自然材を使っているいろいろ楽しむ技法とか、それをお祭りの飾りにするものがふんだんにあります。それともう1つは、こういったものはすべて仮設材で、半年たてば土に戻すために処分できる。モンスーンアジアのデザインを基調とした博覧会場をつくらうというようなことに達しました。これは、今までの中ではかなりの抵抗があったんですが、それは徐々に話していくことにします。

もう1つ、先ほどもお話ししましたが、博覧会というのはランドスケープだけじゃな

しに、ゲートをつくる建築ですとか、それから案内所、ベンチ、トイレ、いろんな専門の人たちが寄ってきてデザインしていくわけです。その人たちに、ばらばらにならないように、こういうデザインでいこうというデザインの指針を非常にわかりやすく、非常に強く打ち出さないと、ここだけ藁でやったのにこっちはステンレスになっちゃったみたいなことになって、統一がとれないわけです。先ほどの山、野原、街じゃないですが、すぐにわかる。イメージの伝達のはっきりしている。そういうことからモンスーンアジアでいこうということにしました。

これはその実際ですが、大通りです（下図）。大通りの真ん中にひたひたの川を流しまして、これはベンチじゃなくて3畳とか4畳半ぐらいの床几です。上がり込んで寝そべられるようなところ。それから、竹とか丸太で檣を組みまして、そこに季節ごとに取り替える布を張りました。実は私の子どもころは、お祭りの屋台といったら、丸太と縄でできている。終わったら、すぐ撤去できちゃう。今でも祇園祭の鉾建ては、丸太と縄だけでやられています。これも丸太を立てるのに、かつてのようにコンクリートで基礎をつくってじゃなしに、土をそのまま



仮設的な装置と利用シーン

掘って、掘立てておけばいい。

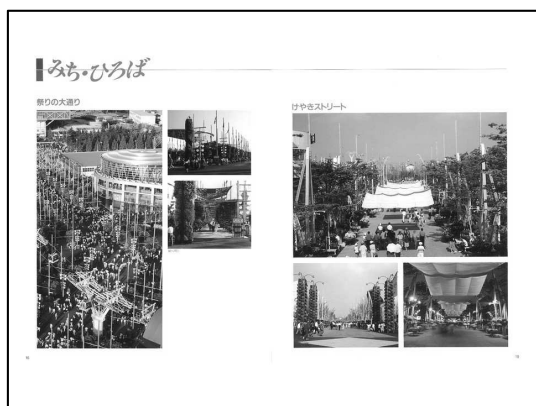
この日陰の布なんですけれども、通常、博覧会というとテントが多用されます。テントというのは、布で優しいようでも、非常に緊張感を持って引っ張られて成り立っている。ここの博覧会では、できるだけそれをルーズに、そして居心地よく、優しく。そういう会場をつくらうとして、そのための布の扱いというのは、ファッションデザイナーが一番よくわかっているんじゃないか。そこで、建築のテント屋さんでなしにファッションデザイナーをお願いして、季節の模様とかたるみ具合を考えていただき、丸太のところに張り付けたものです。まだほかにもお見せしますが、こういうような会場づくりをすることによって、暑くて、たくさん歩いてくたびれた人たちが、ベンチに行儀よく座るんじゃないかに、この床几の上で足を水に投げ出し、ごろんと横になってお休みするというシーンがたくさん出てまいりました。博覧会の事務局の偉い人に、「3,000 円近くも払って中に昼寝に来る博覧会は珍しいね」と言っていたことがありました。

これもその一端で、こんなに人が混雑しておりますが、事故もなく済んでおりま

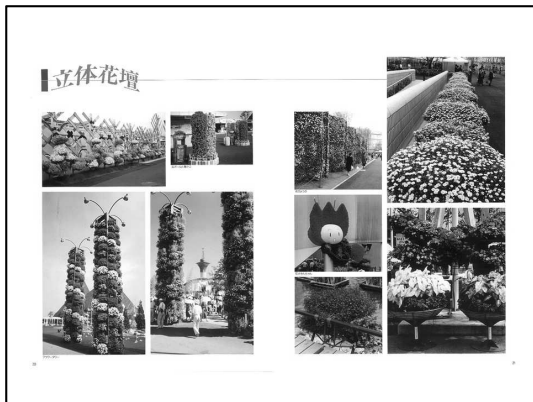
す（左下図）。というのは、先ほど松本さんからちょっとお話がありましたけれども、博覧会のベテランの先生たちにご指導いただいて計画をしていた時は、通路幅だとか直線性、見通しがいいとか、そういったことに非常にこだわって、神経を使ってつくるようにと言われておりました。ましてやそこにこういう花・緑とか丸太を組み入れるというのは、「事故が起こったらどうするの？」という話で、最後は「もう知らないよ。勝手にしなさい」というような感じで乗り切ったわけです。実は今までの博覧会というのは、パビリオンの展示が主体でした。ですから、ゲートを入ると、人気パビリオンにいち早く殺到しなければいけない。早く入場するのにどれだけ並ぶのという話ばかりだったんです。ところが、花博でこれだけの花を持ち込んだりいろいろなものをセットしたりしたにもかかわらず、パビリオンへのダッシュが起らなかった。むしろ、この道をゆっくりと散策し、先ほどの床几でもって寝ころんで、ゆったりと会場を楽しんでくれる。そういうような行動にすっかり変わってしまった。ランドスケープ、造園は、勝ったなというような感じでありました。

これは、その当時、道路や広場に置かれていた花のディテールです（次頁左上図）。花の柱だとかフラワーバスケット、針金のワイヤーの上にヤシ殻を敷いただけの植木鉢、そういったものがたくさん考案されました。

それと、このあたりなんかも結構色濃く出過ぎぐらいに、モンスーンアジアの水飲み場です。それから、池のほとりに面積がな



多くの利用者でにぎわう大通り



花のディテール（立体花壇）

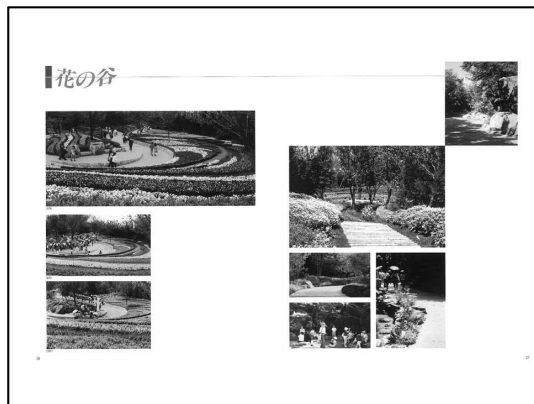
かったので、張り出しデッキにガゼボというか東屋です。この中にはツルものの花が仕込まれておりまして、シーズンになると、ここから顔を出して花を咲かせるなんていうこともやっておりました。これは大池のメインイベントの噴水の絵です（下図）。

先ほど松本さんからお褒めの話がありました「花の谷」。野原のゾーンに属しますが、非常にガーデニアスな花展示空間です（右図）。

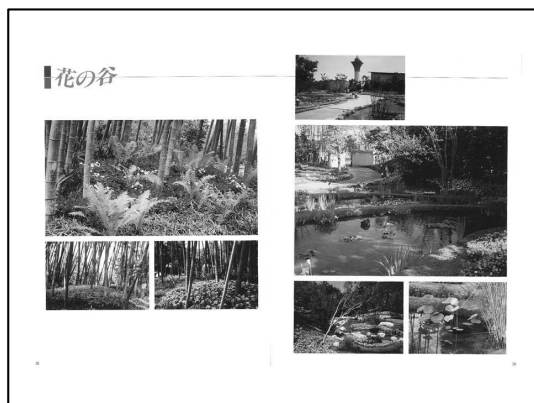
これは、さらにそのディテールなんですが、竹林の中に洋ものの花がマッチするとは思えませんで、通常はそういう設計はまずやらないですけれども、ここではふんだんにそういったものができております（右下図）。花博以前には公園緑地というと花は

なかったんです。なぜかという、花というのは恒久的な資産にはならない。公園は恒久的に維持されなければならないので、木とか灌木は使ってもいいけど、ワンシーズンで終わってしまう花はだめだったんです。花博以降、それがふんだんに使われるようになったという先駆けかと思います。

これは沿道花壇。山のエリアでは特に道路が長いんです。街のエリアでは、先ほどのように道路の修景は立体的なものを点在させるようになっていましたけれども、山のエリアでは、林を後ろにライン状の花壇。きょうは残念ながらいらしてないですが、鷲尾さんという方のデザインによって、花がシーズン、シーズンでいろんなものが出てきたり、変わったり、彩りも変化していったりする。今ではボーダー花壇、縁取り花壇と



いのちの海 水辺のテラス



花のディテール（花の谷）

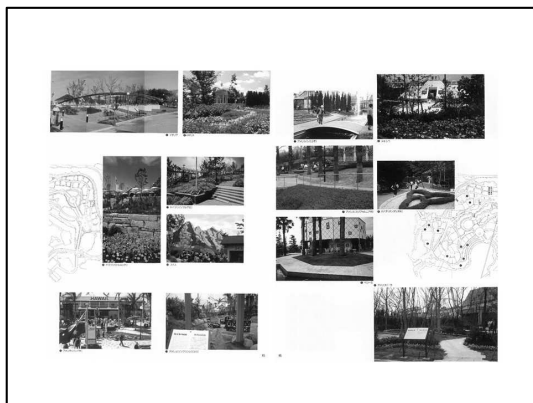
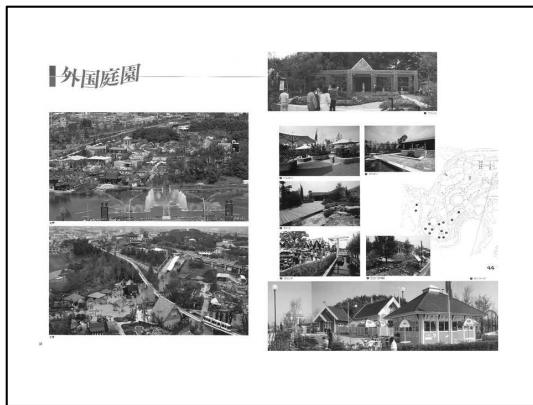
いいすけれども、その当時、イングリッシュガーデンという言葉がこれからかなりはやって、園芸の中の一つのブームをつくっていったように思います。

これは外国庭園です。個別にはそれぞれお話はいたしません、山のエリアにちょうど高級住宅地のように敷地が点在していて、その中にさまざまなガーデンとか建物が組み込まれているエリアです。

これも同様です。私、ちょっと数字に疎いので、何カ国、何団体が世界から来てくれたかというのを忘れてしまったんですが、かなりの国から来ていただいております。このためには、先ほどの開催理念とか、その国のどんな庭かというのを想定しながら絵を描いて、松本さん、皆さんに海外に出てそれぞれの国に折衝しに行ったりしたことが

ありました。それでこれだけふんだんな外国庭園とユニセフなどの団体の庭園が集まったということです。

あと、何かご質問がありましたら、後ほどのシンポジウムでお受けいたしますので、よろしく申し上げます。一応私のお話は以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。



外国庭園

第2部 パネルディスカッション

話題提供・資料説明

糸谷正俊（株式会社総合計画機構相談役）

ただいまご紹介いただきました糸谷と申します。よろしくお願ひします。時間は85分ぐらいを予定しておりますので、進行に皆さんのご協力をお願いしたいと思います。初めに、このパネルディスカッションの進め方、目的、それからお手元に配りました資料などについてお話をいたします。そのあと、質問に対する対応の時間をとる予定でございます。

お手元に配りましたこの資料（巻末 資料2）でございますが、1990年の花博が終わった時に、当時、会場建設、それから花壇管理などにかかわった造園コンサルタントの各会社の担当者が分担して書き上げました。『花博の会場計画とデザイン』という本でございますが、これを抜粋したものです。花博の会場計画、設計の仕事及びこの冊子の編集の責任者だった景観設計の藤田好茂さんが前書きに書かれておりますけれども、造園コンサルタントが関係した仕事をきちんと記録し、どういう役割を果たしたかということを書いた上で、後世にそれを正しく伝え、また後世からの批判や評価を受ける原点としてこの記録集をまとめたということでございます。ここから抜粋しました。

10ページが表紙、11ページがその目次構成になります。12ページが、先ほど大塚さんのお話がありました、基本構想の中の基本理念がまとめられております。大阪大学の山崎正和先生が基本構想委員会の基本理

念のまとめ役をなさったわけですが、大変すばらしい表現でもって花博の理念を書き上げていただきました。これをベースに、私ども、会場設計あるいはその後の会場運営についても当たってきたということでございます。ぜひご一読いただきたいと思ひます。13ページには総括編のほうでまとめました「花博とは何であったか」というシンポジウムのまとめでございます。

14ページ、15ページ、16ページにわたっては、「花博の提起したものと造園の未来」ということで、実は関西の造園学会の先生方から、花博が終わってどういう感想をお持ちかということで寄せ書きをしていただきました。このところを少し説明させていただきます。初めに近畿大学の鈴木先生に書いていただいております。造園設計のいわゆる機能とデザインの融合、美しく機能的な空間のしつらえについて、非常にうまくいっているじゃないかというお褒めをいただいております。しかし、2人目の近藤公夫先生、当時は神戸芸術工科大学にいらっしやって、基本構想の委員でもあられたわけですが、この花博の成功に酔



糸谷氏による話題提供

いしれずに、反省の端緒として果敢にもっと広い世界に挑戦していけという叱咤激励をいただいております。また、3人目の大阪府立大学高橋理喜男先生からは、花博という非日常空間をどこまで普通にある日常空間にしていけるのか、そしてこの高水準の管理ノウハウをぜひ公園管理に生かせという注文をいただいております。4人目の大阪府立大学安部先生からは、花博の財産を広く社会に生かしていくために、ランドスケープ・アーキテクトという専門家の職能を確立すべきだという意見を頂戴し、最後に、本日お見えでございますが、京都大学の中村先生から、この博覧会は花の博覧会だ。緑の博覧会ではなかった。これからはしっかり準備して、本当の意味の花と緑の博覧会をいつか将来実現すべきだという意見を頂戴しております。将来に向けてしっかり辛口の評価をいただいております、今読み返しても、非常に先見性のある、また温かい激励のコメントであったと思います。この提言のうち幾つか、例えば資格制度などは既に実現しておりますけれども、多くはこれからも継続して取り組んでいかなければいけない課題になっております。

戻りまして、「花博とは何であったか」という13ページの資料でございますが、造園関係者が花博が終わった時にシンポジウムを開きました。真ん中の写真は25年前の私でございます。ちょっと時の流れを感じますが、やはりコーディネーター役を命ぜられまして、まとめをしております。そこでは当事者の一員として、花博が非常に成功裏に終わったことについては自信を持ってよかろうと。しかしながら、今後はコミュニケーション技術とか、ちょっと専門的になり

ますがマネジメント技術、こういういろんな世界にも挑戦して、使命感と責任を持って都市づくり、環境づくりという世界にも挑戦すべきであるというようなことでまとめをしておるわけでありまして。このシンポジウムの写真でも、ちょっとわかりにくいですが、松本さん、宮崎さん、大塚さんにもご発言をいただいたというようなことで、25年たちましたけど、いろいろお感じになることがあったのではないかと思います。

講演内容について

(糸谷氏)

ここから議論に入らせていただきます。質問に対するお答えは次の段階に任せまして、お三方に順番にお話をいただいたわけですが、時間の関係でちょっと言い足りないとか、あるいはお話を聞いたんだけど、ちょっと違うのではないかと確認したいということがお互いにあると思いますので、順番にお話しただければと思います。お一方3分ぐらいでお願いしたいのですが、まず宮崎さんからお願いします。

(宮崎氏)

特に付け足すということではございませんが、会場内のいろんな供給施設がございます。これも私どもで施工いたしました。例えば電気とかガス、それから上下水道などもやったわけです。特に電気系統につきましては関西電力がやってくれたんですが、2系統に分けて給電しました。なぜかといいますと、1つのほうに落雷等があっても動かなくなっても、片方の系統から電気を供給できる。会場内を快適に保つためのいろんな仕掛けも計画建設部のほうでつくり上げたということです。

それから、先ほど大塚さんのお話の中で出展件数のご説明があって、ちょっと忘れてたとおっしゃっていたので補足したいと思います。花の博覧会の場合、短期展示と長期展示、フルタイムの展示と、両方認めているんですね。短期展示というのは、一定期間内だけ展示して、それをコンテストの対象にしよう。そういったことで件数の読み方はいろいろあるのですが、屋外出展の全

体としては国際庭園が55ございます。55カ国出てくれております。それから、国内庭園及び花壇として、花木苑が34庭園、ふるさとの庭51庭園、これは東京都、大阪市を除く各都道府県が出してくれました。それから、花あわせの庭が32。さまざまな庭ということで、今の国交省、建設省のさぼうランド、初めて労働組合が参画してくれましたユニオンスクエア・ガーデン、指定都市の集まりの大地の息吹、それから日本庭園、日本の伝統芸術盆栽、園芸のさまざまな庭のグッズ、協会がつくりました大花壇、これは先ほどから説明がいろいろございました花の谷、花栈敷、花のテラス、遊びの庭、立体花壇等、これをひっくるめまして仮に5つといたしますと、大体224の出展がございます。短期のものを合わせますと300を超えております。これが大体参加してくれた庭の数でございます。以上です。

(糸谷氏)

ありがとうございました。博覧会でよく問題になっておった、女性のトイレが少なくして列が長くなるのは、この博覧会の際はそう顕在化しなかったと考えています。確か計画上は女性トイレをかなり多くした。これは松本さんかな。

(松本氏)

あまり覚えてないんですけど、博覧会の経験のある人の話とか聞いたら、やっぱりそういうところは経験知に習わないといけませんので、2,000万人として、2%ぐらいがピークなんですけど、20万人ぐらいを目標にして容量を決めよう。20万人というのは大体1%。ですから、20万人一遍に来た時に間に合うようにつくらしようというようにつくったと思います。ただ、当

時、設備のほうを担当していた木村さんという人がいて、その方が、普通の手法でいくと男子幾つ、女子幾つなんですけど、あまり滞留時間がないので男はすぐ済むけど、女性はすぐ済まないから、その割合を少し変えましょうというので、たぶん女性を1.5倍ぐらいにしたと思います。

それから水洗の普通はタンク。大阪市の条例でもタンクですよ。タンクにためたやつを流すということだったんですけど、直結にしてフラッシュ、水道管から一体でばーっと出るやつですけど、あれだとたまる時間がないので速くいけるということがあって、木村さんの提案でフラッシュ式にした。これも守口市と大阪市に掛け合っただけで変更してもらったんです。そんないろんな工夫があっとうまくいったと思います。

(糸谷氏)

それじゃ、松本さんのほうで、付け加えることとか、ほかの講師の方と確かめたいことなどございましたら、よろしくお願ひします。

(松本氏)

特に今のところ結構でございます。ありがとうございました。

(糸谷氏)

大塚さん、どうですか。



意見交換の様子

(大塚氏)

私も特にというわけではないのですが、猛暑というのが松本さんの問題で上がっておりましたけれども、花と緑の博覧会にかかわらず、その後、静岡とかあちこちで猛暑への対応が問題になりました。90年の花博の時には西三荘水路というのが真ん中に入っていて、その水路に対して両側に結構空地があったんですね。ほかの空地はほとんど出展で使われてしまっているんですが、その水路沿いの空地を利用して、それこそ丸太とよしずで休憩所を急遽何カ所か作りしました。今、公園のことに頭を巡らせてみますと、指定管理者によっていろんなことができるようになってくるという意味で、もう少し柔軟な対応が我々が持っている知恵と技みたいなきっかけでできないかなというような気がしています。

もう1つは、うれしいことがありまして、花博では竹だの丸太だのを使ったということをお話しさせていただいたんですが、そのあと国道2号線の地下の駐車場、梅新の永い工事がありました。花博で一緒にさせていただいた土木の部長さんがその担当になられて、何と竹でもって安全柵、出入禁止の柵を国道2号線につくっていただいた。あれは花博の名残というか延長で、非常にうれしかったことです。以上です。

(糸谷氏)

ありがとうございました。私からもちょっと質問したいこともあるんですが、それは会場からの質問が終わったあとに回していきたいと思います。

質疑応答 / 討論

(糸谷氏)

会場からはたくさん質問票をいただきました。全部読み上げる時間はちょっとないと思いますので、代表的なものだけにさせていただきますが、ご容赦ください。それから、質問にあわせて意見もたくさんいただいておりますが、時間内で読める限りは読んでいきたいと思っております。

■ 花博開催後 / 跡地利用について

まず、質問ですが、宮崎さんへ参加者の方からの質問です。「跡地利用の計画はどういうふうに進んでいるのでしょうか。その中で花の万博の理念は生かされていると思えますか。また、生かすためには何が必要だと思われませんか」というご質問をいただいております。

(宮崎)

先ほどお金の説明が松本さんからございました。その中で「存置」という言葉が出てきておりました。会場内に残すための施設として期間の前に建設した施設がございます。これは当然残すべき施設でございます。そういったものを骨子にして今の形になった。ただ、エントランスのございましたところは、私が先ほど説明申し上げたとおり、道路を湾曲させましたので、真っ直ぐ通しました。今のところ、横断歩道で分断という形になってはおりますけれども、あれの南側の土地について、長い間、いろいろ跡地をどうするかということが議論されておりました。最近になりまして運動・健康施設ということで施設が入ってきております。そのほか、さらに新しくするべき、あるいは復旧す

るべき場所はまだあまり残っていないのではないかと考えております。

私もリタイアして大分長くなります。お手元の資料で私の年齢が1947年生まれとなっておりますけど、私、37年生まれでございます。10歳サバを読んでおりますので、ご訂正いただきたいと思っております。そういったことで、会期中にあったもののデコレーション等を除いて、大体もとのままを維持していく。それから、外国庭園の出展は、全部当時残した。ただ、問題が出てきている。私が一來園者として見ている、外国庭園が少し傷んできたかな、かなり傷んできたのもある。ああいったものを何かリフレッシュする方法はないものかという希望は私も持っております。ですから、大幅に変わったところはないのではないのでしょうか。以上です。

(糸谷)

外国庭園の話が出ましたけど、外国庭園の残し方については、ほかの方からも質問をたくさんいただいておりますので、ちょっと読み上げさせていただいて、必要ところは補足していただきたいと思っております。いずれも宮崎さんへということですが、まず谷口さんから。「花博開催と開催に至るまでのご努力に敬意を表するとともに、感謝申し上げます。花博閉会後は鶴見緑地の再整備を進められましたが、国際庭園については十分な保存の措置が行われておらず、建物の多くが老朽化により取り壊され、残っているものも廃墟のようになっております。花博閉会后、国際庭園の保存について、有料化して資金を集めるとか、計画的に保存・修復することの検討はなさったでしょうか」。

続けて同じようなことを申し上げます。参加者の方からは、「花博の大きな特徴であった屋外展示、特に外国庭園は、今も残存しておりますが、老朽化も目立っております。今後、どのような対処をしていくのが望ましいとお考えでしょうか」。

中村先生からもいただいております、「二十数年ぶりに鶴見緑地に来ました。昔の面影がはっきり残っているのに驚き、懐かしく思いました。案内板を見ると、山のエリアに国際庭園などが残されているようなのですが、これらの庭園の維持管理、再整備、利用の仕方は現在どうなっているのでしょうか。将来のあり方を含め、教えてください」という外国庭園に対するご質問がありました。宮崎さんは今の当事者ではないと思いますが、わかる範囲で何かお答えいただけますでしょうか。

(宮崎)

ご指摘、ご意見のとおり、私も担当した者として、外国庭園はあの当時の形に近い状態には戻したいなあとは個人的には思っています。ただ、ご存じのとおり、よく新聞で見ますのは、もう民生費に食われてしまって公園の修理費も出てこえへんという情けないお話はしょっちゅう聞いております。これはむしろ市民の皆さんにお願いして、住民パワーで、もうちょっと何とかしたれやという声を上げていただくのも1つかなと。

市民の方に頼るばかりでなく、この4月からですか、緑地全体の管理体制が変わるように聞いております。今、国が主導しております指定管理者制度が導入されまして、管理者が変わります。今まで直営で管理していた分が、全面的に、それが妥当かどうか

は知りませんが、代わって管理すると。直営ではないということになります。そうしました時に、どれだけ成果が出てくるかというのも1つの期待ですし、そういった自由のきく形の管理体系ならば、外国庭園なども、全部一遍というのは無理でしょうが、傷みの激しいものからある程度手を入れていく。あるいは、花の入っている庭園もございますけれども、会期の状態に近い、花ですと消耗品で幾ばくかは購入できるかもしれませんし、あるいは宿根草を植えることによってリニューアルする経費が節約できるかもしれません。そういったいろんな知恵を使って鶴見緑地がさらによくなるように、ご努力を市のほうでもいただきたいと思っております。これは私の希望です。それが皆様のご質問に対する答えになっているかどうかはちょっとわかりません。

(糸谷)

ありがとうございます。大阪市も主催者の1人でお見えになっておりますので、きっとしっかりと伝わっただろうと思います。

■ 会場計画について

(糸谷)

続けて質問のほうにまいりたいと思いますが、感想が来ております。「中曽根の話やら出て、思い出したことが多いです。バリアフリーになっていない花博は、その当時のままですよ。バブルの時代を思い出します」というような感想をいただいております。

それから、名前は入っておりますが、大塚さんに関連しての感想でございます。「日本企業の資金が随分大きかったことに感謝します」。ちょっと間違っているかもしれま

せんが。「街のエリア、山のエリアの配置がはっきり分かれていたというすばらしい博覧会であったこと、大阪の財産です。モンsoonアジアのデザインの統一も、やわらかいものを醸し出しておりました」というようなことで感想をいただいております。

それから、やはり大塚さんに、これは質問になると思いますが、会場計画のゾーニング図、先ほども出ましたけれども、「動線、デザイン図、こういうものをたくさんつくられたと思いますが、それぞれどれぐらいの期間をかけられて計画づくりを決めていかれたんでしょうか」という質問です。これ、答えていただけますか。

(大塚)

明確にどうのというわけではないのですが、先ほどもトータルで宮崎さんのほうから3カ月というようなお話もありました。ワーキングのほうは汗をかいて徹夜すればいいんですけども、そのあと会場計画委員会のほうでそれをどう了承していただけるか、そこからのまた修正などに結構時間がかかったように思います。それから、先ほどの松本さんのトイレの話ですとか、同じようなので細かくはごみ箱からベンチまで、さまざまな数をカウントしなければならぬんです。広場の配置がいろいろ出てまいりましたが、広場には飲食もくっついていましてね。そういったものを含めてトータルで、個別に一つずつ具体化していったと思います。それは、全体的な流れの中よりも、また個別に次の段階でというような設計になってきますので、そういうものを含めると、会期までずっと設計は続いていたように感じます。

(糸谷)

大塚さんがスライドでお見せになった会場計画平面で、夢があって、しかしながら没になったというプランをお示しになられて、覚えておられると思うんですが、ちょっと補足をしておきますと、私、会場計画を担当しておりまして、一番初め、まだ花博記念協会もできておらない段階で、あの生命のスパイラルというプランは東京でつくられました。東京で我々の仲間が作りました。それは、本当に何ていうか、まず何かを打ち出して夢を出していかなきゃいけないということで、まだ要件も何も決まっていない段階で描いたもので、非常に情熱がほとばしるような絵でありましたけれども、描いた本人もあれが実現するとは思っておりませんで、ああいう要素が生かされればええなあということで描きました。

そのあとのエスキースで、建物が2階建てみたいになって風船が出ているようなスケッチもありましたけど、それも同じような意味で、非常に情熱がほとばしってどんどん絵を描きたいという人たちがいっぱい集まってきて、ボランティアでやっておった時代のものでした。そういうことで、実は初めから没も何もなくて、ああいう絵を描いたこともあるんだよということ記録に残したいということで、私が編集する時に載せたので、誤解のないようにしていただきたいと思います。

それから、山のゾーン、野原のゾーン、それから街のゾーンという3つのゾーニングがありますが、先ほども休憩室で宮崎さんとお話ししていたんですが、会場計画委員会でそれを決めるのもすごいディスカッションがありました。特に磯崎新先生は、建築家でありますけれども、こういうゾーニン

がみたいなどをするなど。ゾーニングというのは、端的には都市計画のゾーニングというものがあまして、土地利用を決めてしまうわけですね。博覧会なので、そういう土地利用をきっちり決めるということ自体がおかしいんじゃないかと。もっと環境コンセプトというか、機能コンセプトというか、重複していてもいいんじゃないか。アバウトなゾーニング。そういう意味でエリアという名前に変えたと思うんですけどね。ゾーニングという言い方をやめて、3つのエリア、山のエリア、野原のエリア、街のエリアが、最終形にはきれいに分かれたみたいになっていましたが、初めは重なるような形で第1次の会場基本計画をつくったという記憶がありまして、そういう大論争もありました。私個人としては、手塚治虫さんにあの時生涯で1回だけ会えたのがとても印象に残っております。

ちょっと要らんことをしゃべってしまいました。

■ 花博での花の演出について

次は、花の質問が来ております。実は先ほどの話にもありましたが、造園の会場計画をつくっていった仲間のうち、当時、荒木造園にいらした鷲尾金弥さん、最終的には花博の花のプロデューサーになられたわけですが、その方をきょうもお呼びしたんですが、ご体調を崩されておるということで来ていただけなかったんです。そのかわりという怒られちゃうんですけども、花博の主演の一つであった花の演出について、またその花の演出を支えるいろいろな苦勞について、それから花博が終わった後の花の社会に対する影響について、当時、花博

記念協会では花壇管理課長さん、あるいは花壇管理センターを仕切っておられた、大阪府から出向された三浦さんが会場にお見えてございますので、ぜひ三浦頼彦さんのほうから、花博での花の演出について、これまでの講演の補足をしていただければありがたいと思います。よろしく申し上げます。

(三浦氏 (参加者))

今ご紹介いただきました三浦と申します。私は、花博の時には花博協会の植物管理部の植物管理課長という立場で、屋内で切り花を展示する場合とか、企業さんやメーカーさんが自分のところでコンテストに出展される花、あるいは敷地の中に植えられる花、そういうものは外国庭園を含めて私らの担当外で、協会が出展した花壇についてのみのことですので、どうぞご了解いただきたいと思います。

花のボリュームですが、全体で1,200品種、総数としては350万株。この350万株というのは、後にも先にもこういうイベントでこれだけのボリュームを使ったのではないのではないか。先ほど申しましたコンテストの出展とか企業の出展、外国庭園の中で植えられているのは、たぶんその2割ぐらひはあったかなど。これ、正確な数字をつかんでいませんけど、それぐらひはあ



花の演出について説明する会場参加者 (三浦氏)

たかなということでございます。

ちょっと敷地全体の絵が出ますかね。糸谷さんから質問を受けたのが3日ほど前で、準備が十分できていませんので、ご了解の上、公式記録にはあまり出ていないようで非常に私らが苦労した問題をポイントに、ちょっと話をさせていただきたいと思いません。

まず、何と言っても我々が一番感謝しなければならないのは、生産者の皆さんです。生産者は、北海道から沖縄まで、ほとんどの都道府県から生産した花を持ってきてもらったんです。遠くは、夏の秋田からサルビアを持ち込むのに、当然夏ですから日中はうだって運べない。夜間に何度も途中で休憩しながら運んできてもらったということもあります。それはそれで生産者も非常に苦労されたのかなど。

次が、花の品質管理ですが、1,200種350万株のうち200万株ほどが一・二年草です。ということは、非常に弱い花ですね。今、皆さんが園芸店で買いになるのは3号ポットの10センチほどの小さいやつですが、花博では特殊な規格を設けまして、3.5号ポット、ちょっと大きなポットです。花のボリュームから言ったら、今皆さんが園芸店で買われる花よりも5割ぐらいはボリュームが大きくなっている。そういう花を、2、3割から5割ぐらい開花した状態で持ち込む。それを現場で処理するというところでございます。

それから、花のこういう使い方もあるかなど。これはまさしく、たぶん何の公式記録にもないと思いますけれども、VIPがしょっちゅう来られるんですね。花壇を見たり、会場の中を歩いてご覧になる。この中の

皆さん、ほとんどの方が花博を見学されたと思いますけれども、いわゆるVIPと一般の人との仕分けをするのに、その時はガードマンがこういうふうにならずと手をつないで、後ろを通られる。前に一般の観客の方。狭い4メートルか6メートルの道を歩かれる。それをずっとガードマンが手をつないで。

ガードマンというのは大きいんですね。そういう方がおられるから、見えない。それで、これはえらいこっちゃというような話で、私らのところへ話が来まして、中で使っておりました直径1メートルのワイヤーバスケット、さっきもちょっと出ていましたが、それに花を植えて。ストックしているんですね。次に出る、あるいは出たものはかえるということで、ストックヤードに置いている。それを3日か4日前に警備のほうから何とかならんかと。ルートはここやと。いつ来られるというのはわかっているけど、我々はどのルートを通られるなんていうのは全然聞かされていませんから、ここからここまでの間何とかしてと。それを500メートルなら500メートル、300メートルなら300メートル、1メートルのワイヤーバスケットを夜中にだーっと道の真ん中に並べるというようなことで、そうすると腰ぐらひの高さに花があって、ご覧になる方は1メートル先を通られる。VIPのほうも一般の方の顔が見える位置にあるということで、これは比較的人気があって、最後までどんどんどんその数が増えていった。それを毎晩夜中に運び込むということもありました。

もう1つ難しかったのは広報。花はいっぱいあるけど、花の名前がわからない。教え

てくれと。それはプレスについても同じことだった。例えば花の前に看板を立てたら、写真を撮ろうと思っても写真にならんわけですね。で、いろいろ思案して、ちょうど葉書よりも少し小さいぐらいのラベルをつかって、花の横へ何メーターかおきに1つずつつける。最小限の品種と学名と名前。外国の方が来られても、学名が入っているから名前がわかる。専門の方が来られても、その種類が明確にわかる。例えばパンジー、ビオラだけでもどれだけの品種があるか想像してください。その時にはたぶん日本にある品種のほとんどが来ていた。パンジー、ビオラだけでも27種類ぐらい。ちなみにオープニングの時に植えました花は、山のエリアで約10万株、野原のエリアで、ここに「花の谷」があって、これが10万株、栈敷、舞台を中心にしたところで10万株、それ以外の街のエリアで約20万株。大体50万から60万株が全体のオープニングの時の花です。ですから、それだけのものをご覧になると、うわー、すごい花やなということがわかりいただけるかと思います。

それを3月20日にはある程度完成せえと。これはプレス発表がありまして、4月1日からオープンになるから、それまでに写真になるところをつくれと。ところが、現場のほうはとにかく引っ繰り返っているわけですね。本当に部分で完成しながら、写真にして。その時にはまだ霜があるんですよ。大阪の場合は4月8日ぐらいまでは霜が下りる。そうすると、霜対策も当然するというのがオープニングではありました。

広報では、今のラベルの話と、それから今見頃の花がどこにあるんですかと。私に聞かれても。毎日会場は歩いていますけれど

も、今見頃の花は何か。プレスにしたら、今でなくて来週。日曜日に新聞に出したいんですけども、来週の花はどこに行ったら一番いいんやと言われて、これは頭を抱えましたが、協会の中に現場を見て判断できる人がいましたから、毎週金曜日にA41枚のペーパーをつくりまして、見頃の花2、3種類と、それにまつわるエピソードというか、例えば諺のようなコメントをちょっとつけると、それを使ってプレスのほうがいろいろ広報をしてくれる。これはありがたかったですね。

次はストックヤードといって、例えば50万とか60万株を、早いのは10日に1回ずつ入れ替える。遅いのも1カ月に1回は入れ替えるというサイクルでやる。そういう部分の難しさがあって、植物管理センターと花壇管理センターを西ゲートの横に仮設の建物を建てまして、そこに会議室を設けて、それぞれの施工部隊を同じ建物の中で。24時間、屋外の花壇の350万株の維持管理がここですべて行われました。

先ほどの鷺尾先生の話ですが、会場へは大体朝5時ごろ。会場をずっと回って、6時から毎日ミーティングをするんですけど、その時には私の横に座っていて、ぼけーとしていている。それまでに担当のところへは事細かに指示が出ている。で、施工屋さんの判断に任せる。そういうところで毎日会議をする。その会議は、大体20人から30人。メンバーとしては60人ぐらいおるんですけど、毎日ですから、休日の人もいればいろいろ。そういう人らが毎日、自分の担当の話と、関係ないけれども隣の話とかを全部聞いているから、病気が発生したぞ、あそこが問題があると全部わかっているわけです

ね。自分のところはどうか、きょうは何も問題なかったけれども、次に出るかもしれないというのがすぐ判断できる。それをこの管理センターでやった。

もう1つ、この管理センターで5月の連休に、職員のコミュニケーションを図るために再イベントをやりました。中のレストランを借りてやったり、今の管理センターが8,000平方ほどあるんですね。そこで焼きそばをやったりたこ焼きをやったりというので、全部自前で。それぞれの職員の家族を呼んで、一緒にやる。それから、60人の職員、作業員を含めたら1日に最高250人が出てくるんですけれども、そういう人たちが家族を含めてということでものすごい喜んで、それが結果として非常にスムーズに進んだかなど。

あとは安全管理。夜中も仕事をしていまずから、朝、皆さん家に帰るのに、絶対事故があってはならないということで、これはやっぱりそれなりの問題ということで、非常にきついかねどもいろいろな勉強をさせてもらったということでございます。(拍手)
(糸谷)

ありがとうございました。花の話だけで何時間でも語っていただけるんですが、短い時間で申し訳ございませんでした。

京都大学の今西先生と柴田先生から、花のあしらいについてのご質問をいただいておりますけれども、室内での花の演出については、今ここへ参加しているメンバーではちょっと答えにくいというか、対応しかねるところがありますので、今の屋外出展中心の花の演出ということでご勘弁いただきたいと思います。大塚さん、何か花の演出で付け加えることとか、いいですか。

(大塚)

やはりフラワーバスケットのように場所に対して独立的にあるものと、園路の真ん中にせせらぎの道とあって、水を流したりなんかしているところがありましたが、そういう水辺の環境というような枠内でもって仕上げるものと、2つあるのかなど。まわりの環境に対してなじんでいくようなものがコンセプトに合っているような気がしました。

(糸谷)

そのほかにも質問を幾つかいただいております。吉村元男さんからは、「花博が鶴見緑地で行ったことに対して何を残したか。これは問題ではないか」というお話をいただきました。実は吉村元男さんは『エコハビタ』という本を出されておりますけれども、鶴見緑地がごみの山からいかに公園になってきたかというようなことに携われまして、それが花博になって、そのあと今の公園になったわけですが、要するに花博の遺産がちゃんと生かされているかどうか、そういうご質問だと思いますので、これは後ほどまたお三方に答えていただくことにしたいと思います。

質問についてはこれぐらいにさせていただきますが、松本さんへのクエスチョンがなかったので、僕から2つぐらい。1つは、「人間と自然の共生」というテーマが、何を探しても、会場基本計画を探しても会場基本構想を探しても出てこない。誰がいつ決めたんや、機関決定があったのかということについてご存じのようなので。「人間と自然の共生」というのは、当たり前のように僕らはそれで会場設計して、そのあとの理念の継承という時に使うわけですが、いつ、ど

のように決まったか。ちょっとお話があったんですが、補足していただければというのが1点。

もう1つ、すごいお金の額が出ました。周辺の整備で千何百億円、会場の建設費で合計して480億円、運営費が420億円というのがありますけれども、実は物の本を読んでいますと、私どもがやった最初からそうだったんですが、非常に緊縮財源で、5年前の科学技術博に比べると国費の導入の仕方が全然違うと。初めから決められて、中曽根民活ということで、国の金はこれしか出さないということ、4年前か3年前に決められて、それで悪戦苦闘しながらやっていったと作業の現場では思っているわけですが、そのあたり、この花博の持っていったマネジメントの斬新性といいますか、それをどう評価していったらいいのか。ちょっと変な言い方ですが、現代の公園の経営問題にも通じる場所がありますので、花博で事業のマネジメントでご苦労なされたことで参考になるようなことがあれば、教えていただきたいと思います。

■ テーマ「人間と自然の共生」について (松本)

最初の「共生」のところは、先ほど申し上げましたけど、私の上司の個人名を言うと坂本新太郎さんという人がいて、この人は非常に自分の仕事を大切にするというか、給料をもらっている分の仕事は給料をもらっているところに返せみたいな人です。建設省はいろんな仕事をしていますけど、我々は公園をつくるか公園行政に対して給料をもらっているんだから、きちんと公園の立場を主張しろと。その中で調整して

きて建設省に出すのが当たり前だ。ただ、一番大事なところは、ちゃんと公園の給料の分だけ働けみたいな人だった。最初からみんなと妥協して、建設省全体でよければいいじゃないですかという立場に立つ必要はないという人だったんです。その人と話をしている、先ほどの山崎先生が最初に基本理念みたいなものを書かれているんですけど、山崎先生が書かれた時も「共存」という言葉が使われていて、読み返したことはありませんけれども、それでやっている時に、「共存ではない、これは共生という言葉が正しい」というふうに言われたのが最初だと思います。

これは会場計画の時もそうですけど、先ほどは申し上げませんでしたけど、建設省の立場でいうと政府出展というのがありますね。普通は政府館という名前で、万博でも日本政府館なんですけど、ここは政府苑なんです。そこも思想がちゃんとしているというか、花の万博なんだから建物じゃない、全体として政府がどういうふうはこの博覧会にかかわるかというので、政府苑、「苑」という言葉を使うのが正しいと。パビリオンの政府苑の中だけではなくて、全体として、これは実際にできているかどうかという議論は別として、一応日本庭園的に。会場全体は山のエリア、野原のエリア、街のエリアになりましたけど、政府苑も同じような格好になっているんです。

政府苑の建物は5枚の葉っぱみたいになっていますけど、あれは我々が考える葉っぱではなくて、蕨の波なんです。要するに、あそこに山に抱かれた集落があって、蕨の波がある。それから、会場に入ると川が流れていたんですが、日本庭園的というと川が

流れてきて海に入ると。大池があり、あそこ
に流れて行って海に入っていく。そういう
こともあって、政府苑の基本計画を見てい
ると「共生」という言葉が出てくるかもしれ
ません。僕の感じでいうと、坂本新太郎さん
という人が非常に早い時期にそういう話を
したと思っています。それがいろんなパン
フレットとか何とかに使われたのも、非常
にわかりやすい言葉だということに使われ
たんだと思います。

■ 花博の事業マネジメント

それから、お金の話ですけど、最初決めた
時には非常に緊縮財政の時だったので、き
ちきちの中でやりましょうということでした。
一つほかの博覧会と違うのは、鶴見緑地
という公園が既にあったので、いわゆる敷
地造成とか基盤整備にそんなに要らないと
いう前提に立っていますので、その部分は
少し減っていると思います。ですから、筑波
にしる 1,000 億円ぐらいの金が使われてい
ると思いますが、そういう意味では少し少
なくなっているということと、先ほど申し
ましたが、結果的に公園として将来に残る
部分は別枠という形でやったので、360 億
円プラス 120 億円が将来に残す公園の分
ですよと言いましたが、最終的には 120 億
円よりは相当膨らんで、恐らく 300 億円と
かいうことになっている。

今も残っていると思いますけど、会場入
ってすぐ左側に大きな通りがあって、大塚
さんの絵で櫓みたいなのが建っていたとこ
ろ、あれは 20 メーターぐらいありますね。
あんな大きなものは将来の計画では要ら
ないんですが、ああいう園路を将来残すん
だということで公園事業でやってしまう。そ

ういうお金の使い方をたぶんしたと思いま
すので、今、大阪市は非常に苦慮されてい
る。あるいは大阪市民の方は、むだな税金と
は言いませんけれども、あんな大きな広場
は要らないだろうと思ってらっしゃいます
でしょうが、花博のためには必要なお金だ
ったと思いますし、いろんな演出をする
という意味ではいいんじゃないかなと思いま
す。

(糸谷)

ありがとうございます。質問と回答の時
間をこれで終わらせていただきます。

■ 花博から学ぶべきこと

さて、花博は 1987 年の 10 月に起工式を
行いました。開園される 3 年前です。その
時、中曽根首相が祝辞を述べられておりま
して、それをちょっと引用させていただきます
と、「日本人の花と緑を慈しむ心で、愛
情と誇りを持って、しかも産業都市として
ある大阪で花博を開催して、世界の人々に
楽しんでもらえるようにしよう。花博を地
球村の道しるべにしよう」。これが当時の日
本社会を代表する花博への思いだったと思
いますし、この思いを受けて花博が開催さ
れ、逆に言うと大阪の鶴見緑地というところ
で花博が開かれたという意味も、非常に
ここからくみ取れるところがあるかと思
います。

21 世紀に入りまして、日本も世界も、政
治、経済、環境、文化など、さまざまな面
で先行きが不透明でありますけれども、花博
が提起した先ほどのテーマ「自然と人間の
共生」を受けて、ここから私たちは何を具
体的な成果として社会に還元していくべきか。
このことにつきまして、吉村さんのご質問

もありましたけれども、今度は大塚さん、松本さん、宮崎さんの順番で、花博の財産といえますか、花博から学ぶべきこと、このテーマでありますけれども、これについてのまとめの話をいただきたいと思います。

(大塚)

物的なことと我々の活動に関することと2点あると思います。1つは、鶴見緑地に何を残したかということで、先ほど来、鶴見の緑がどうなっているのか。これは中村先生の寄稿していただいた文章にもあるかと思っています。

もう一方で、松本さんのお話によく出てこられた坂本新太郎さんが、当初の段階で結構悩んでおられた時があったように思います。それは何かというと、花だけでどれだけのものが見せられるか。要は、緑というものがベースになれば、花は存在しないんじゃないかということをおっしゃっていた。先ほど水辺の花というようなことでお話しさせていただいたんですが、典型的には評判のよかった「花の谷」、あれが単にインパチェンスの赤だけじゃなくて、竹やぶののからみで存在している。そのへんのが会場全体を見てみると、25年たって、やはり松本さんのお話の40メーターの園路ですが、その両側に4列のクスノキがあります。これは花博の遺産の中で目立ったインフラになって残っているんですが、きょうも見てみると、あまりいい状況じゃない。やはり土の問題とかそういったものに対してもっとケアがあって、あの財産をもっと生かしていかなきゃいけないんじゃないかと感じました。

もう1つ、花博で活動したことによって、私自身が非常に儲かったというか、汗をか

いた分だけよかったと思っているのは、造園関係以外の人たちと話がたくさんできた。それまでやはりランドスケープというか、公園あるいは庭園という枠内でもってコミュニケーションをして会話が成り立って、技術の話をしてきた。それが針のむしろといいながらも、都市計画なり建築なり、それも我が国で結構ハイレベルな方たちと話し合う、まざり合える非常にいいチャンスになっていて、それが、個人的に申し上げて申し訳ないんですが、いまだに私にとっては1つの財産になっている。大汗かけばかくほど、あと、いい友達になれるといえますか、そういうことが非常にあったなど。ですから、先ほどゾーニングでオーダーをはっきりさせないということもありましたが、どうも公園というと公園という枠内に落ち込んでしまいがちなんですが、こういうチャンスを生かして、それをどれだけ広げられるかどうか。相手の方たちも、ランドスケープを知ることによって利点がある。我々の言葉も広がりを持ってくるというようなことがありました。その2点だけお伝えさせてもらいました。

(糸谷)

ありがとうございます。松本さん、どうでしょう。

(松本)

花博は何を残したか。先ほど申し上げましたけど、ここから全国に、花がきれいだとか街に花が増えた、そういうところは現象としては評価すべきだと思いますが、我々として何をやったか。それについては反射的にみんな反応した部分で、花博にかかわった我々とか、あるいは緑部隊の人間が果たして何かをなし得たのかということにな

ると、それは個々人で手を当てて考えてみたらいいと思います。

例えば花博が終わってから屋上緑化とかいろいろな緑化の手法が増えてきて、今、再開発とかビルを建てる時には緑化してないところはほとんどあり得ないような格好なんですけれども、それ自体が我々の発信としてきちんとできているのかどうか。むしろ花博の成果を敏感に肌で感じて反応した人は、我々の世界の人じゃないかもしれないというあたりについては、ここで私ははっきり言いませんけど、一応検証してみてもいいのかなということだと思います。

それから、先ほど国際庭園の話をしていたんですが、今回のこのシンポジウムも花博記念協会に主催していただいて、専務理事さんもそこに座ってらっしゃいますけど、花博の理念の継承ということで、コスモス国際賞とか、全国のいろいろな活動をしている方に助成金を出されるとか、いろいろな形で継承するための活動をされているというのは敬服に値する。25年間やってこられたので。

ただ、花博の残すべき国際庭園とかが仮にだめになっているとすれば、花博記念協会として何をしていったらいいかというのは、もう一度考えていただいたらどうかという感じがするんですよね。コスモス賞なんかは賞金が高いと思いますけれども、外の方たちにいろいろな緑化活動の助成金を出されるのだったら、ぜひ国際庭園を何とかしろというNPOの方々に50万円でも100万円でもあげたほうがいいんじゃないかなという感じもするし、そういう意味で今の鶴見緑地の状況、鶴見緑地というよりは花博の遺産を検証していただいて、記念

協会としてやることはもっとあるのではないかなと。すみません、勝手なことを言ってます。そういう感じがしました。

(糸谷)

ありがとうございました。では、宮崎さん。

(宮崎)

やはり先ほどの質問もございました。あとをどうすればよくなると思うか、どうしたいのかというふうなご質問がございました。全くおっしゃるとおりで、今も松本さんが1つの提言をなさいましたけれども、いいものにすればまた入園者も増えるだろうと思います。ただ、悪くなっていけばいくほど、入園者は減るだろう。それはどなたがお考えになっても同じことだと思うんです。何とかそれをくい止めるためのよくなる方法を考えていただければ、この大きな公園1つでも残れば、これは花博の遺産であると堂々と言える。

これはあんまり言わなくてもええ話ですけど、もう卒業しちゃったから、25年前の話なのでしゃべらせていただくと、当時、この鶴見緑地の土地は借金で買っていたのです。それで、花博を開催するということで、一般会計のほうから借金を返して、それで本当の公園になった。借地をしていたような形から、地権も大阪市の公園財産になったということです。それも1つの花博で残った財産かなと思います。

それから、先ほどお二方が同じことをおっしゃったように思うんですけれども、花博協会というのはいろんなところから来た混成部隊でした。いろんなところから人が集まっています。各々の専門の方が多いですけども。例えば私のおった部です

と、電気は関西電力、ガスは大阪ガス、電話関係はNTT、空調システムの冷水温機は大阪ガスといったことで、専門家がたくさん集まりました。それを緑屋が、コントロールという言い方はよくないかもしれませんが、皆仲良く仕事が前に進むようにせないかんわけです。それはやはり人間関係が大事でした。

来ていただくような方は皆さん、それぞれ人柄のいいしっかりした方ばかり来ておられますので、大した問題はなかった。むしろ混成部隊のほうがスムーズにいったのかなど。単独の今までのしがらみのある編成部隊よりもよかったのかなど。その時にいろんな人と知り合えたというのが、私にとっての個人的なすばらしい財産であります。以上でございます。

(糸谷)

ありがとうございました。

残されている時間は5分しかありませんが、すみません、会場からお一方だけ発言していただこうと思います。ご指名をさせていただきますが、資料でも出しました京都大学の中村先生にお願いしたいのですが、中村先生は、政府苑をどこにつくるかということで大分悩まれた経験を。そういうこともあったなと思い出しましたけれども、本日の講演会でお気づきになったこととか、先生のご意見などをいただければと思います。よろしく願います。

(中村氏(参加者))

いろいろと懐かしいお話をたくさんお聞きして感慨に浸っているところなんですけれども、私、最初の委員会で手塚治虫さんと同席したんですね。手塚治虫さんが、この博覧会は子どものための博覧会にすべきだと

おっしゃって、その時は当たり前の話だと僕は思っていて、そう気にもとめていなかったんですが、しかし私も84歳ですけれども、こう年寄りが多くなってくると、本当に子どものことが気になってくるわけですね。

この公園にきょう入ってきた時に、2、3人の小学校高学年の子どもたちが賑やかに自転車に乗って走っておったんです。ああいうのを見ると、やっぱり手塚さんのおっしゃった子どもが楽しめる公園に鶴見緑地がなくなっていくというのは非常に大事なことだなあと、きょう改めて感じたわけです。そのためにも例えば外国の庭園なんか、当時、私たちが楽しんだ公園は、恐らく影も形もないかもしれないですけども、その中でいいものを少しずつでも復活させていくというようなことが、鶴見緑地というものが花博という歴史を通じて、大阪の中で意義を発揮していくために必要ではないかなと思いました。

(糸谷)

ありがとうございます。また、先生から先にいただいたように、緑の博覧会をぜひ実現するように、残りの人生はあまり長くはありませんけれども、やっていきたいなと思っています。



会場参加者(中村氏)からの意見

■ 参加者へのメッセージ

講師のお三方にさっきもいろいろご意見をいただいたわけですが、皆さんが花博を経験されて、それぞれの心の中にある思いみたいなものがそれぞれの大きな宝物だというようなお話もあったかと思えますし、そういう気もいたしました。最後に、お三方から、造園関係の若い人、学会の方、コンサルタントの方、施工業界の方がお見えになっておられますので、そういう若手の皆さんへのメッセージ、それから市民の方へお伝えしたいこと、最後に一言ずつお願いしたいと思います。よろしくお願います。

(宮崎)

これはお願いみたいなものですが、大阪の人は、新装開店の店へ行って飾ってある花を持って帰ってくるでしょう。あの習慣、どう思われますか。というのは、これをお話しするのは、花博最後の日でした。閉会式が終わりまして、皆さん、退場していただいた。そしたら、入口周辺に植えてあった花をお持ち帰りになった方がおられる。

私は大阪生まれの大阪育ちですから、やったのは大阪の人やとは思いたくないんですけど、いわゆる市民性というんですか、花に対する思いやり、そういうものを皆さん、これから。いろんなボランティア活動をして緑化に協力していただいている方はたくさんおられます。ボランティアをしておられてごそっと抜かれたら、悔しいでしょう。ボランティアの方は大変な目をしておられると思います。そういったことで、何とか具体的にきれいにするのも大切ですけど、心の啓発をどうしていくか、またお考えいただきたいと思えます。

(松本)

特に若い方ですけど、きょうのこういふのがあると、あまり深く考えないんですけど、結構いいことをやったなあと思ったりするわけです。皆さんの仕事もたぶん結構いい線いっているんですよ。なので、自信を持っていろんなところで発言することが大事だなと思います。さっき言ったように屋上緑化とかいろいろやっているけども、一体誰がやったんだという話がありますけど、「俺たちがやったんだ」と声を上げられたらいいなと。とりあえず自信を持って頑張りましょうということです。

(大塚)

公園というのは、我々ランドスケープ屋の聖地といいますか、そこに入り込めば、ほかの手を出せない。公園屋だけの土地だよと。そこに逃げ込むのはやめましょう。公園だけじゃなくて博覧会もそうなんですけど、むしろ公園的な発想を持って街全体に広がるというか。私、ある意味で公園という土地利用をやめたらどうなのと思う時があるんです。あまりにもそこに入り込んだら、もうそこから出ないで済むよというのは、これから我々の世界を狭めることになるので、もっともっと外に向かって行きましょうということだけきつく言わせていただきます。

(糸谷)

ありがとうございます。

総 括

総括

糸谷正俊（株式会社総合計画機構相談役）

ちょっと予定の時間を過ぎておりますが、最後に本日の会のまとめを総括ということでさせていただきたいと思います。いろいろ意見が出ましたので、とてもきれいに整理してまとめることはできないので、独断と偏見でまとめることをご容赦いただきたいと思います。

私は計画設計に携わったわけですが、この花博は、造園界、それから園芸界に関係する人たちばかりでなく、大阪市の緑化リーダーの方も来ておられると思いますが、全国で緑化リーダーなど緑のまちづくりにかかわっておられる方すべてにとって、大いなる挑戦の場であったし、その花博が成功したということは、将来に向かってこの花博が基準点、原点になったというふうに思います。

つまり、造園関係の専門家として見てみますと、何度もお話が出ましたが、今までどちらかというと都市計画の先生方とか広告代理店が主導で博覧会運営がなされてきたわけですが、時代がだんだん世紀末になってきて、環境の問題とか、豊かさでも心の豊かさをといったように時代が変わっていく。そういう節目に行われた博覧会でありまして、またどんどん公共事業を注ぎ込むというのではなくて、知恵と工夫でうまくやっていかなければだめだという時代の博覧会であったと思います。

そんな中で、企画段階から会場計画、会場設計、花壇、管理運営、こういうあらゆる面でのコンセプトづくりやデザインについて、

造園の関係者が管理統括をかなりの部分できて、かつて誰も経験したことのないようなすばらしい会場環境がつくられました。で、来場者に大きな感動を与えた。このことは、関係した我々一同、誇るべきことであると思います。このことを常に原点に意識しまして、日頃の業務、毎日の仕事についても振り返ってみて、ちゃんと花博の情熱を維持できているか、緑のまちづくりをちゃんと推進できているかというように、花博を定点として今現在の私たちを観測し、その花博の遺産を考えていく。そういう評価を継続していくことがとても大切だと思います。

また、緑化リーダーの皆さんにとっても、なぜ大阪かという話がちょっと出ましたけれども、鶴見の周辺は、当時、椿本チエインとか機械工場も多かったですし、まだまだきれいな街ではなかったわけですが、その産業のまち大阪で花と緑を成功させたということがとても自信になられたと思いますし、これからどうしようかという時に思い出す理想の姿が花博であったかと思います。

この25年間、阪神淡路大震災がありましたし、東日本大震災があって、また地下鉄サリン事件などの凶悪事件もありました。バブルが弾けて、不況が今も続いております。人の記憶というのはどんどん風化が進んでいくわけでありまして、この花博のすばらしい基本理念も、少子高齢化の中で、既に雑踏とか巷とか、非常に局地化してきている面もあります。

多くの都市が空洞化してきております。そういう意味で、花博の理念も、一部風化した面もないことはないと思います。さらに、若い人にとっては、こんな大舞台で仕事を

するというのは、バブルやからできたのであって、これからもうあり得へんのと違うかというふうに諦めている方もあるいはいらっしゃるかもしれませんが、私はそうではないと思います。このグローバルな時代にあって、こういう不透明な時代だからこそ、まだまだ地球レベルの混乱は続いていくと思うんです。そういう時に造園、ランドスケープの関係者、特に若い方が、国や地域の将来のあるべき姿をイメージしながら、自分の世界である造園技術、庭園文化、こういうものに磨きをかけて、使命感を持って幅広い分野に挑戦し、地球環境とか社会の健全化、健康化に貢献していくという役割を今こそ果たすべきだと思いますし、そういう責務があると思います。これが造園を志す人にとっての花博から学ぶべきことと私が思う点であります。

そして、市民の皆さんに対しては、産業都市大阪をどのように美しくしていくか。「花博の経験を地球村の道しるべにしてください」という中曽根元首相のメッセージもありましたけれども、そういう大切な取り組みを使命感を持って続けていっていただきたいと思います。

本日の会議は、日本造園学会関西支部でしっかり記録されるというふうに聞いております。25年前のシンポジウムが本日のシンポジウムでの花博評価につながったように、25年後の2040年に、本日お見えの若い方々から、この花博がどのように評価されていくのだろうか、私はそれを非常に楽しみにしております。できればそれまで生きていたいと思いますが、ちょっと無理かもしれません。

というようなことで、ちょっと最後のほ

う、わけがわかりませんが、本日の会のまとめとさせていただきます。皆さん、ご清聴ありがとうございました。

閉会の挨拶 宮前保子（公益財団法人国際
花と緑の博覧会記念協会 専務理事）

長時間にわたるシンポジウムにご参加いただきまして、ありがとうございます。主催者の一員といたしまして御礼を申し上げますと思います。

先ほど来、いろいろ懐かしいお話を聞かせていただきましたけれども、この花博の理念は、「自然と人間との共生」ということを掲げたものでございます。たくさんのお客様があったというお話がありました、ロンドン万博以来、史上最多の参加国があったというのが、この鶴見の花博の大きなポイントかと思えます。しかもアジアで初の園芸博であったということで、大阪がこういうものを成功させたことは、大変誇るべきことと考えてございます。

実は、今日この日にシンポジウムを開催させていただいていますのも、本年、2015年が花博の25周年に当たる節目の年であるということと、それから造園学会関西支部も設立50周年に当たる、2015年はいろいろな意味で節目の年になって、こういう時期にこの講演会をこの場所で開催させていただいたということは、大変うれしく考



閉会の挨拶（宮前専務理事）

えております。

皆様方からのいろいろなご意見を聞かせていただきますと、私自身も90年の花博の会場計画に参画させていただいたので、その時の若い方々の汗ですとか、ここにお座りになっていらっしゃる諸先輩方の叱責のお声ですとか、さらには最初にビデオで紹介されましたけれども、会場に参加されていた方がとても楽しそうにされていたということを思い出しました。

花博で一体何が今に伝わってきたのかという話は、先ほどコーディネーターの糸谷さんがまとめられましたが、私なりに考えてみますと、1つは、大阪発で花のまちづくりが全国に発信されたということだと思います。オープンガーデンとか花のまちづくりということは、今はもう全国どこの地域でも聞かれていることですが、実は大阪がひょっとしたら遅れているかもしれません。これから頑張って、花のまちづくり、オープンガーデンという取り組みをどんどん大阪発で広げていく必要があるんじゃないかなと考えました。

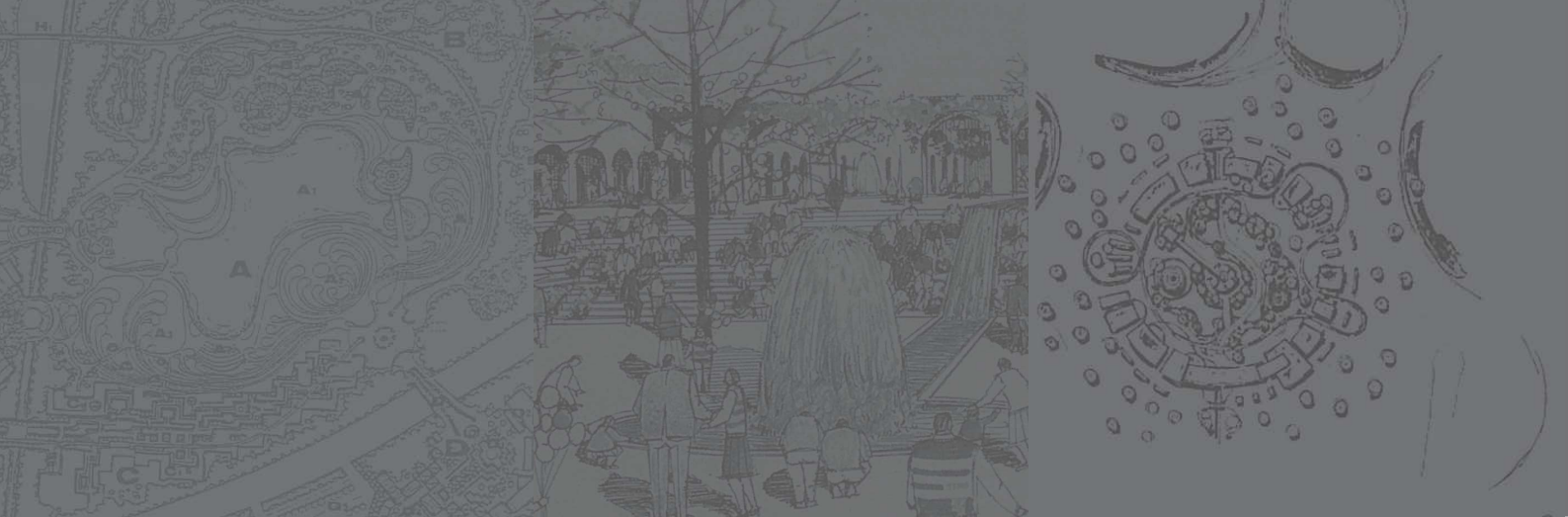
もう1つは、会場のゾーニングの話が幾つか出ましたけれども、山のエリア、野原のエリア、街のエリアと、この3つのエリアを考えたということは、花や緑というのは単に街の話だけじゃない、野原でも考える、つまり、農村地帯とかそういうところでも考えていこう。それから、山は山の花を大事にする方法がある。こういうことを考えた。これも花博の成果ではなかったかなと私なりに考えております。

千里万博が70年、花の万博が90年、そして兵庫県で2000年に淡路花博が開催されました。関西では、この3つの大きな博覧

会によって、ランドスケープという分野でいろいろな意味での技術とか理念が大きく広がってきました。これを誇りに思いまして、関西圏はもっと頑張っ、て、花や緑で街をいきいきさせていこうということが、メッセージとして伝わってくるのではないかなど考えております。

今日ご参画の皆様方が、このシンポジウムのいろいろなご意見をそれぞれの活動の場で生かしていただけたら、主催者としてこれ以上の喜びはございません。本日はどうもありがとうございました。

もう1つお知らせがございます。皆さん方の袋の中に「御堂筋のイチョウ並木マップ」というのが入っているかと思います。実はこれは、本協会のほうで作製させていただいたものです。御堂筋というと大阪を代表する街路でございますし、このイチョウ並木は大阪が誇る並木道です。皆さん何気なく見ていらっしゃるかもしれませんが、これは非常に長い時間をかけて大きな緑に育っています。戦災の傷跡を残しているイチョウは現在も残っております。こういうふうに時間をかけて緑を育てていくということも、長い歴史の中で私たちが学んできたかと思しますので、どうぞこれをお家に帰ってから読んでいただきましたら幸いです。ありがとうございました。



<資料編>

資料1 講演者 発表用スライド



会期前の1,000日と、183日

宮崎 研一

花の万博前の鶴見緑地



花の博覧会



花の博覧会 (イメージ図)

ロゴ・マーク



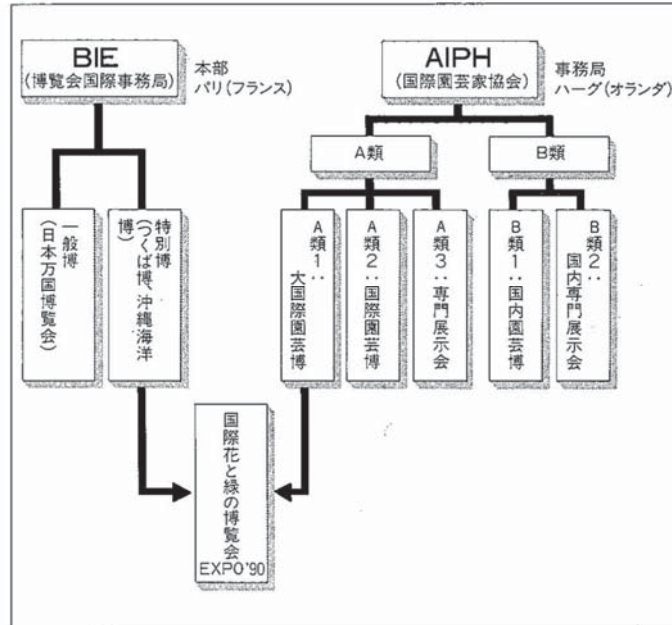
国際花と緑の博覧会

花の万博

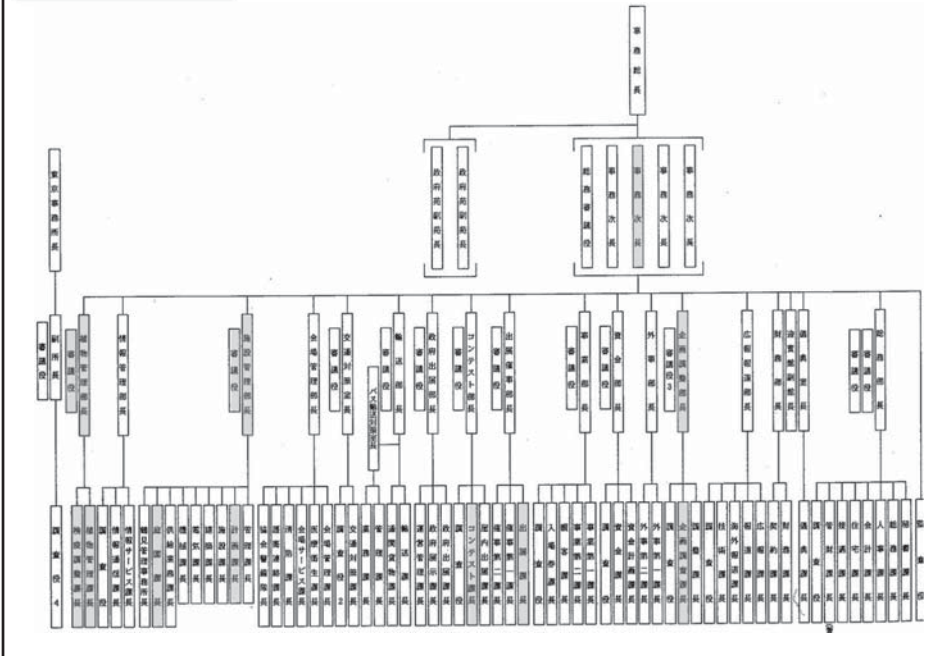
EXPO '90



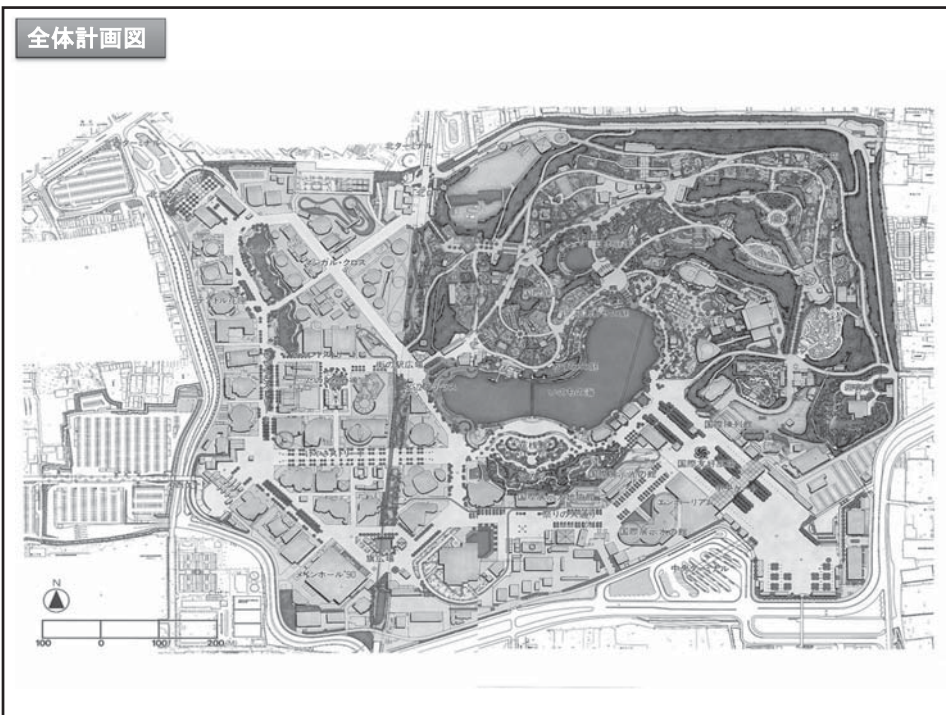
国際博覧会の承認機関



協会事務局組織図



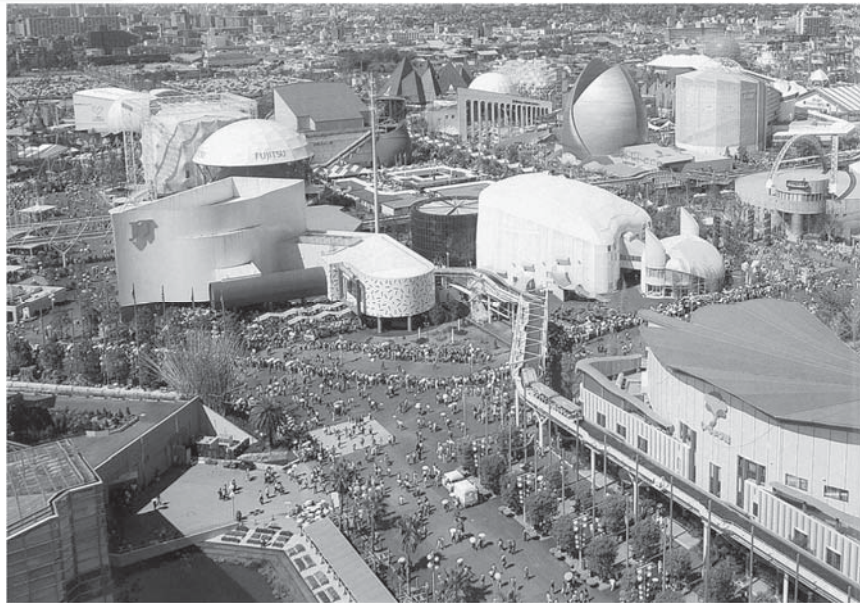
全体計画図



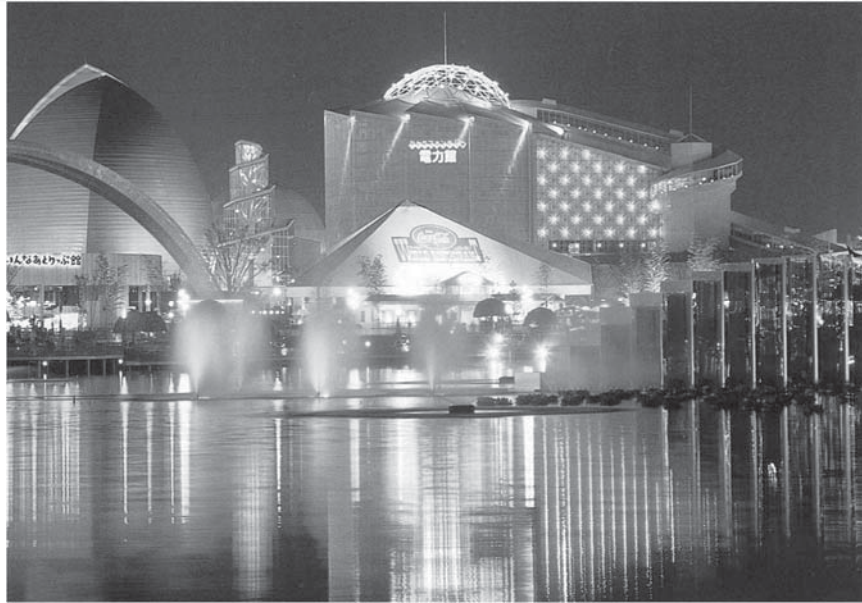
会場全景



街のエリア



街のエリア



山のエリア



山のエリア



山のエリア



野原のエリア



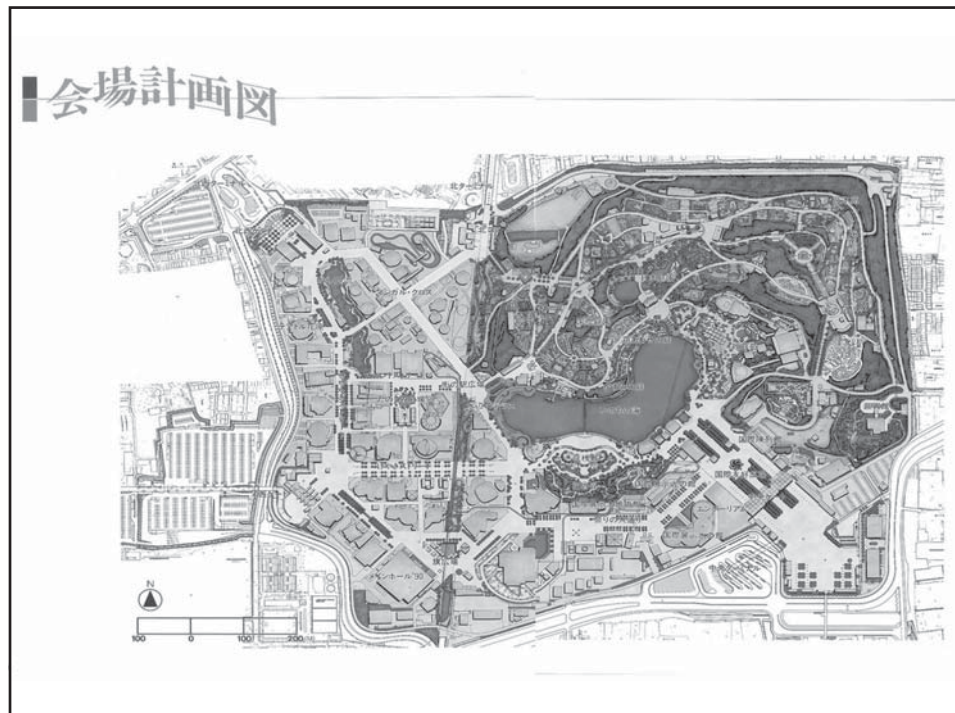
野原のエリア



ご清聴、ありがとうございました。

大阪花博の会場計画

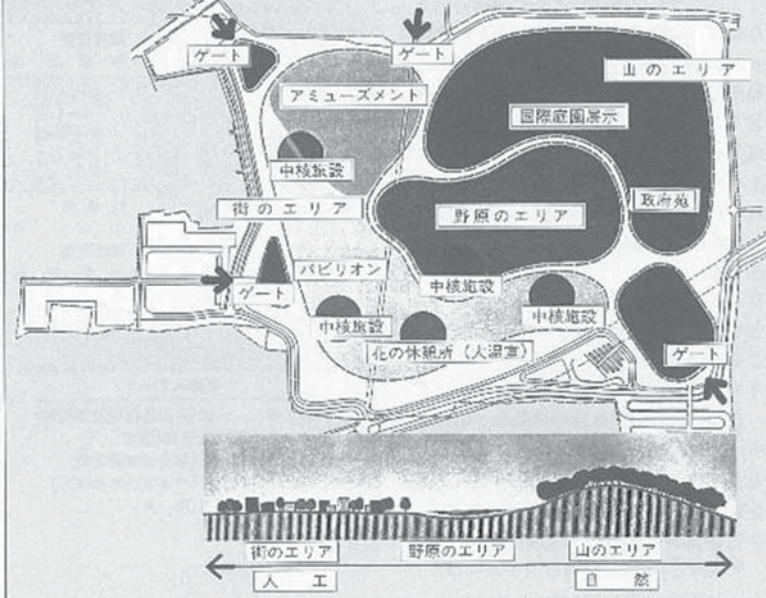
大塚 守康

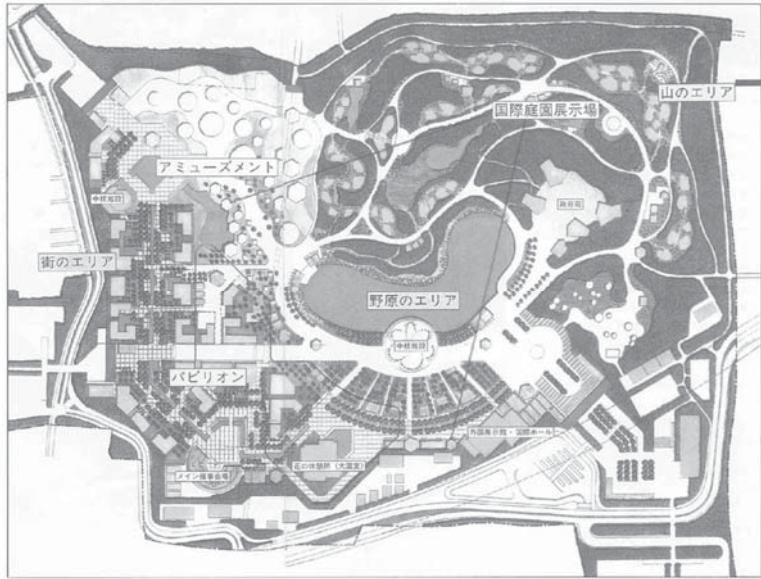
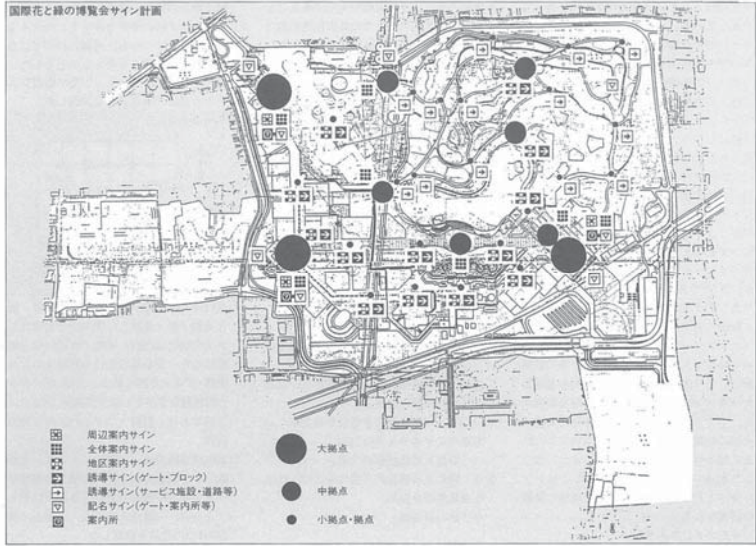


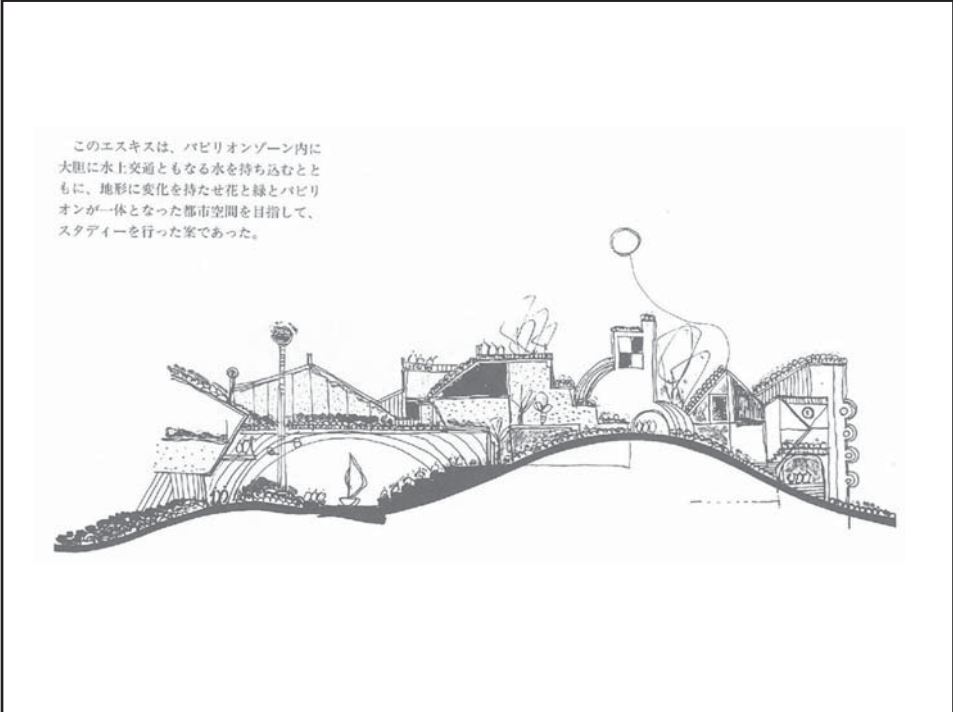
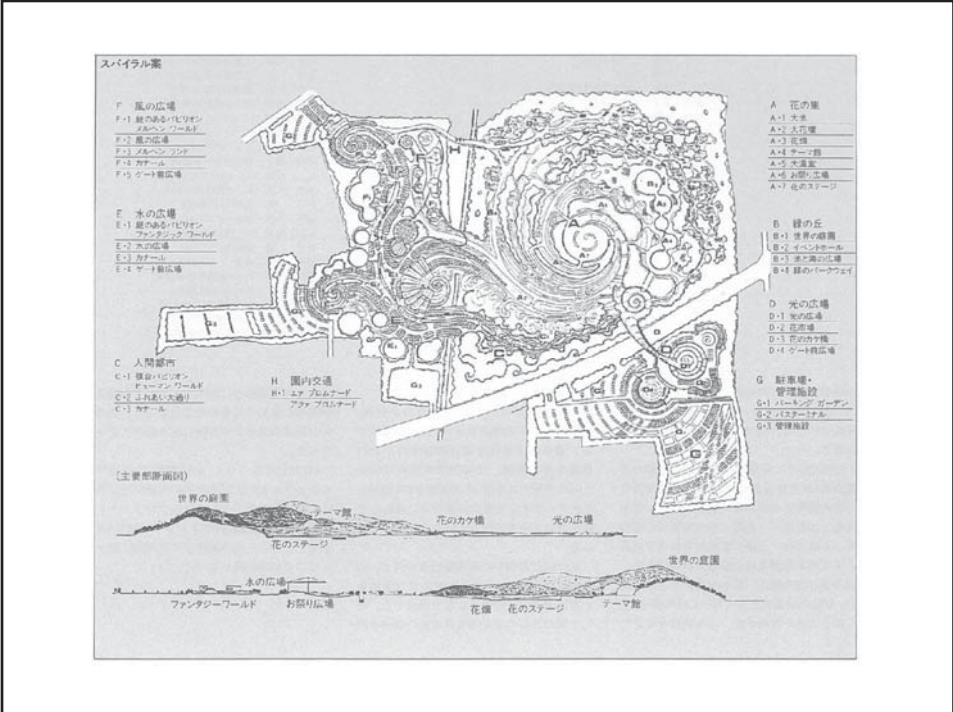
会場全景



会場計画原案









せせらぎストリート



みち・ひろば

せせらぎストリート



みち・ひろば

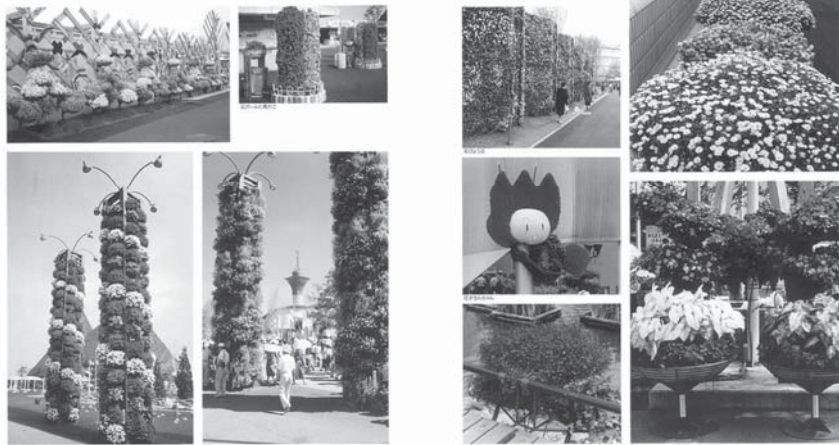
祭りの大通り



けやきストリート



立体花壇



いのちの海



26

水辺のテラス



27

花の谷



28



29

花の谷



28

29

山のエリア
沿道花壇

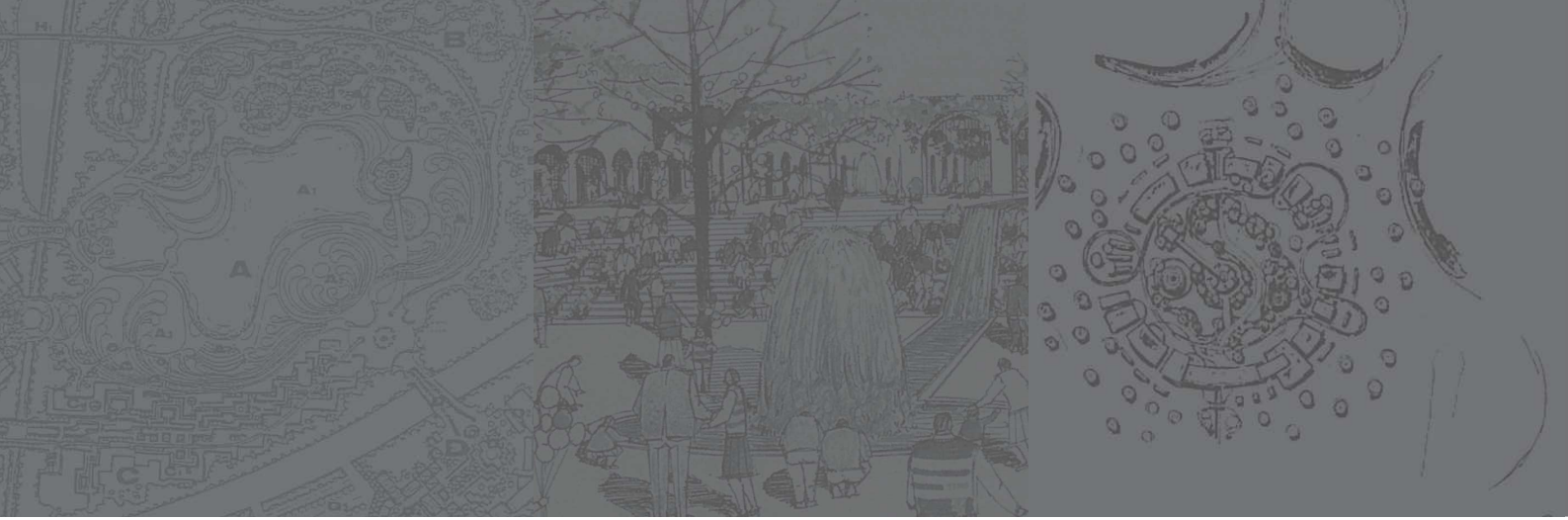


30

31

外国庭園





<資料編>

資料2 講演会当日配布資料



講演者資料

(1) 宮崎 研一 氏 資料

なぜ花の万博が大阪で開催されたのか

宮崎 研一

昭和56年(1981年)に大阪市が1989年に迎える市制100周年記念事業の具現化を図るべく委員会を立ち上げ、夏までに市職員から記念事業の募集を行ったところ、約1000件をこえる提案がありその中のひとつが花の博覧会であった。

56年11月に(花の博覧会調査会)が設置され会場の候補地として鶴見緑地が挙げられた。

57年2月に調査会により構想原案が策定された。

3月には当時の大島市長により博覧会開催の意思表示と市議会に対して協力要請がおこなわれた

5月に花の博覧会プロジェクトチームが発足しオランダのフロリアード82の視察及び調査を参考にして第2次原案の作成をおこなった。

58年度予算に800万円の調査費を計上

8月に市制100周年記念事業として決定、その旨を建設省に報告

9月に市内部関係部局により花の博覧会計画推進委員会の設置。

10月に建設省と大阪市による周辺整備調査委員会を発足。

59年4月公園局に花の博覧会準備室を設置。

8月花の博覧会基本構想を策定。

60年度国に対して博覧会に対する補助要望を行ったときに他の地方自治体でも検討しているとの情報を得た。早速その対策の検討にはいり国際博にしてはどの考えが浮上した。

国際博にするには85年の科技博後5年の間隔が必要となり89年には開催できない。関係各機関と調整の結果開催年の変更となった。

(2) 松本 守 氏 資料

花の万博の経緯と成果（政府関連の経緯を中心に）

開催決定までの主な経緯

1. 1984年10月 中曽根内閣による「緑の3倍増構想」

- ・中曽根内閣の重点施策の一つであった「緑の3倍増構想」を受け、建設省は「緑化の推進について21世紀緑の文化形成をめざして」を策定。緑の国際協調の一環として、わが国において「国際花と緑の博覧会」を開催するため、その構想を早期に立案することが掲げられた。
- ・国際シンポジウム「都市・緑・市民」での国際博覧会開催宣言

2. 1985年8月 日本造園建設業協会が国際園芸家協会(AIPH)に加盟

- ・同時に1990年「大阪国際花と緑の博覧会(A1)」開催の承認

3. 1985年9月 国際花と緑の博覧会のBIEへの開催申請についての閣議了解

- ・担当大臣は建設大臣とする、ただし、建設、農林両省が協力、共同で進めることを確認

4. 1985年12月 BIE総会、1990年大阪・国際花と緑の博覧会の開催を承認 (1986年6月のBIE総会で博覧会一般規則等が承認され正式に国際博覧会として登録)

5. 1986年2月 国際花と緑の博覧会協会設立許可

6. 1986年4月 国際花と緑の博覧会特別措置法公布

- ・国税、地方税、出入国、検疫、通関等についての特例措置

7. 1987年1月 国際花と緑の博覧会関連事業計画決定(関係閣僚会議)

- ・公園、道路、地下鉄等約1,900億円の関連事業を決定

8. 1988年1月 国際花と緑の博覧会全体資金計画決定(関係閣僚会議)

- ・建設費360億円(他に既定の公園整備費120億円)、運営費422億円の資金計画決定

会場計画決定までの主な経緯

1. 1986年1月 会場計画委員会設置

- ・博覧会の主役(パビリオンか花か)
- ・国際博覧会か園芸博か

2. 1987年7月 会場基本計画委員会承認(理事会決定は9月)

- ・基本構成を山のエリア、野原のエリア、街のエリアとする
- ・会場全体が「花とみどり」のテーマとして展開される。

3. 1988年7月 第二次会場計画委員会承認(理事会決定は9月)

4. 出展者(パビリオン等)、施設参加者等との計画調整

開催期間中の主な経緯

1. 事件・事故

- ・ウォーターライド、ロープウェイ、マジカルクロス、台風

2. 猛暑、豪雨対策

花の万博の成果とは何か

(3) 大塚 守康 氏 資料

大阪花博の会場計画

(株)ヘッズ 大塚守康

花の万博はアジアではじめて開かれる国際園芸博である。そして、生命博であるといわれている。生命とは無機的に世界共通に存在するものではない。生命の有機的集合体である自然は、地球上の各地の風土的特性を持って存在している。花の万博において、花や緑を単なる展示物として扱うのではなく、人間とともに生きている自然、即ち命あるものとして考えるのであれば、会場は開催される土地の風土を理解し、それを十分に意識した計画であってしかるべきである。

花の万博の開かれる大阪はモンスーンアジアの気候風土に属しており、文化的な面からも、地球上のその地域の特徴を色濃く残している。ところでモンスーンアジアの文化とは、植物を育てそこから生活の糧を得る農業を基盤とした、いわば、自然と人類との共生の文化である。現在、地球上の多くの場所で都市化が進展し、科学エネルギー依存の画一的生活が標準化しつつあるが、かつて、人類は衣食住の全てを自然に頼りつつ、その地方の風土になじんだ生活を送っていた。特にモンスーンアジアでは、自然の生産力は我々の生活の全てを支えるに余りある強靱さをもって、人類に豊饒ともいえる生活を提供していた。そこには、現代の都市とは違った意味の快適な生活が存在したのである。そこで、博覧会の趣旨が産業科学博から生命博へと移り変わった花の万博において、我々モンスーンアジアに住む人々の、自然とともに暮らす豊富な知恵や技を再度見直し、全世界に向けて発信することは、エネルギー危機を懸念し、新しい時代を模索する現代に、大変意味深いことであると考えられる。このような検討を経て、花の万博会場計画デザインのテーマは、モンスーンアジアの風土性であるとされた。実際のデザイン展開としては、竹、木材、布、縄など、自然をはぐくみえられる共生の成果を随所に活用し、それらの加工、組み立てには伝統的手法を基本とする。また、モンスーンアジア気候風土独特の生活の知恵や方法を取り入れた、生理的にやさしさが感じられる会場デザインとする。などがデザイン指針としてあげられた。特に後者に対しこれまでの博覧会における経験から、真夏の暑さへの十分なデザイン対応が求められたきたが、酷暑となる大阪の風土では特記されるべき要点であった。

このように、自然の生命を生理的な面から見すえ、風土的材料や技術を駆使する会場デザインは、それらを伝統的に培ってきた我が造園界が指導的立場で行う会場デザイン計画に、まさにふさわしいテーマであった。会場のデザインは直接のワーキンググループである我々造園界以外にも建築やサイン、情報などの各分野の多数のデザイナーの混成によって行われるので、明快なデザインテーマを打ち出し、彼らと共通の概念を持つことが重要である。さらに、出展参加に対しても開催趣旨の徹底を図り、統一感のある会場となるように心がけた。

ところで、博覧会ではその主旨主張を明確に表現することに加え、祭りであることが大切な要素である。幸いモンsoonアジアの風土文化には、豊かな自然の恵みを願い、恵みに感謝する祭りの表現を豊富に持ち合わせている。さらに四季の変化が顕著なわが国には、歳時記と言う独特な方法によって四季の移ろいを表す手法がある。さらにはモンsoonアジアの文化は、西欧の統一かつ禁欲的な世界観とは異なり、ポリホニーで開放的である。まさに祭りのデザインとしても打ってつけである。

花の万博ではそれぞれの出展によるテーマの表現を超えて、会場全体が生命の祭典を自然とともに歌い上げるデザインとしたい。

(4) 糸谷 正俊 氏 資料



CONTENTS

EXPO グラフィティ	7
第I部 会場計画総論	48
1. 会場計画策定にいたる経緯	(1)会場計画をめぐって……………49
	(2)花博の概要……………53
	(3)基本構想……………54
	(4)いろいろなプラン……………55
	(5)会場基本計画の確定……………61
2. 会場基本計画	(1)第1次会場計画……………62
	(2)第2次会場計画……………67
	(3)第3次会場計画……………72
	(4)計画と現実のはざままで……………73
第II部 会場の設計	74
1. 会場全体の設計方針……………75	
2. 会場基本設計	(1)園路広場基本設計……………76
	(2)植栽基本設計……………78
	(3)庭園花壇基本設計……………80
	(4)水景基本設計……………80
	(5)サインSF基本設計……………81
3. 会場のデザイン	(1)各エリアの設計とデザイン……………84
	①山のエリア……………84
	②野原のエリア……………86
	③街のエリア……………89
	(2)花壇の計画と演出……………94
第III部 施設の設計	96
1. 施設の設計	(1)園路広場……………97
	①山のエリア……………97
	国際庭園間の広場他……………97
	太陽の丘等……………98
	②野原のエリア……………99
	水辺のテラス……………99
	花栈敷……………100
	花の谷……………101
	③街のエリア……………103
	中央ゲート広場他……………103
	祭りの大通り……………105
	せせらぎストリート他……………105
	(2)花壇(山・野・街)……………111
	(3)迎賓館庭園他……………115
2. 外国庭園の設計……………116	
3. 主要な出展施設の設計	(1)日本庭園……………135
	(2)政府苑……………136
4. 花・緑の設計	(1)花の設計……………137
	(2)緑の設計……………140
第IV部 会場建設ならびに会期中の管理	142
1. 建設工事の状況……………143	
2. 建設体制……………144	
3. 各エリア、各施設の建設	(1)山のエリアの建設……………145
	(2)野原のエリアの建設……………145
	(3)街のエリアの建設……………147
	(4)外国庭園の建設……………148
	(5)花壇の建設……………152
	(6)街の駅広場の建設……………154
4. 会期中の管理	(1)施設管理……………155
	(2)外国庭園管理……………156
	(3)花壇管理……………156
第V部 資料編	158
1. 会場づくりのカウントダウン……………159	
2. 花博関連業務参画の記録	(1)花博プロジェクト室への参画……………161
	(2)園芸及び造園関係専門家による国際交流会義 (国際シンポジウム)とコンテストについて……………161
3. 出展及び入場者の記録……………167	
第VI部 総括編	168
1. 花博とは何であったか……………169	
2. 花博の提起したものと造園の未来……………170	

3) 基本構想

1986年10月に公表された国際花と緑の博覧会全体の基本構想は、山崎正和氏の起草になる基本理念と、8つの基本方針からなっている。

一部では、園芸という文字と造園という文字のどちらが多く使われているか、といったつまらない検討もあったと聞くが、基本理念全体の調子は格調が高く、また目標も具体的であり、よくこの博覧会の会場づくりや会場運営の指針となり得た。

我々ワーキンググループにとっても、計画づくりにいきづまると基本理念を読み返したものである。

基本理念

人類の宇宙飛行は、地球が唯一の青い惑星であることを教えた。高度の生命科学は、逆に一層、生命の奥深い神秘に気づかせた。

20世紀の産業文明の発展は、今あらためて、あの花と緑に象徴された、自然の生命の偉大さを再認識させている。緑こそは、無機物を有機物に変え、生命を根源から生む力である。花はこの隠れた力の優美な表現であり、生命そのものの讃歌である。これを愛し敬うことは、自然と生命を共有する人間の心の本能であり、人間相互の尊重、世界平和への願望のもっとも素朴な基礎だといえる。

そして、21世紀を目前にして、世界文明が大きく変わろうとしている今日、花と緑を身近なものとする技術、園芸と、それにつながる生命科学は画期的な意味を持ち始めた。

世界の多くの国々において、都市化は歴史的規模で進展しつつある。高密度の人口集中地域に住み、その中で生涯をおくる人間の急増は、都市の内部に花と緑のふるさを創造する必要を高めている。自然を愛し、自然を畏敬し、生命を祭る場所と仕組みを、ちまたの中にこそつくらねばならない。住環境を高める園芸の普及、公共的庭園の充実、また自然を学びその美をたたえる施設の整備は、人類の基礎的な生活要求

の一部と見なければならぬ。世界の諸国とともに、日本も路地の一隅にさえ花と緑を育てる伝統を持ち、都市生活の中に自然を創造する独自の技術を培ってきたが、これは21世紀に臨む現代にこそ活かされるべきであろう。

また、今日の世界は大衆社会に向かって動いており、多数の人々が等しく質の高い生活の享受をめざし、文化施設についてもそれが万人のものであることを求めている。これに応じて公園も、このような時代の変化に対応して、積極的に雑踏に耐える花と緑を提供しなければならない。そのためには現代の最高の科学技術を活かし、伝統的な園芸と庭園の知恵を守ると同時に、新しい広場の造形に挑戦すべきであろう。一方、現代人は雑踏の中にあっても緑の前に身を傾し、節度ある自然との交歓と相互の創造的な連帯をめざした、新しい園遊の作法を生みださねばならない。

さらに、現代は、産業社会の構造的な転換の時代であって、従来以上に人間の生命とその環境を尊重し、しかも自然の生命を活用した生産がめざされている。全人類の一層の豊かさと生活の質の向上の糧として、花と緑を積極的に作る技術、機械生産と自然を調和させる技術はもちろん、自然の神秘そのものに依存する生命工学の発展が促されている。今日の花と緑の博覧会は、そうした産業思想の転換を紹介し、産業と生命、文明と自然が対立者ではなく、本来、調和しあう存在であることを確認する場所ともなるはずである。

世界の産業先進国のひとつであり、現代人類の課題を典型的に負っている日本は、自国の文化伝統と、世界の多様な庭園、園芸観の遺産を踏まえながら、今回の博覧会で大胆な実験をも試みて、21世紀の地球社会の平和と繁栄に貢献したいと願っている。

基本方針

基本理念を受けて、今後の博覧会の各種計画を進めるための指針として、次の基本方針を設定した。

(1)花と緑に関する技術、自然と人工を調和

させる技術及び生命科学につながる産業技術の最新の成果や可能性を展示する。

(2)花と緑に関連する科学知識と文化活動を紹介する場とする。

(3)会場を花と緑を取り入れた魅力ある都市環境創造の実験の場とするとともに、21世紀に向けて新しい広場・公園像を探索する。

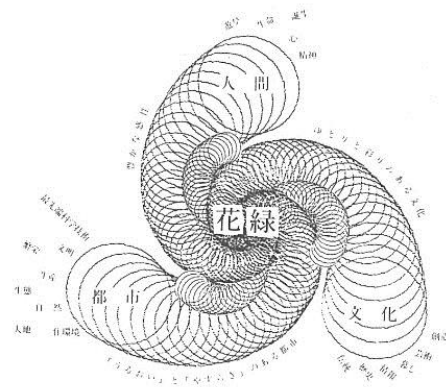
(4)世界の多種多様な花と緑によって、その色、形、香りなどを心ゆくまで楽しみ、自然の美しさ、豊かさを四季折々に昼夜を通して味わえるような会場とする。

(5)人間と自然の共生を祝い、生命の讃歌につながる多彩な催事を展開し、会場全体が活気と楽しさがあふれるものとする。

(6)様々な園遊の場所と機会を提供し、世界の衣食住を含む生活文化を体験できる博覧会とする。

(7)花と緑に対する愛情を喚起し、生物社会における植物の役割の重要性に対する関心を高めるために、世界の人々が語り合い、相互の理解を深め、世界の平和と繁栄に貢献する博覧会とする。

(8)この博覧会の趣旨が、会期前後にわたって、また、会場外へ広く波及するように努める。



1.花博とは何であったか

国際花と緑の博覧会が無事終了してしばらくすると、花の万博の記憶がうすれないうちに我々に反省会、総括を行っておく必要があるという意見がJLCA内部に高まってきた。また、官界、学界などからも、花の万博についての問合せや、記録をまとめる要請などが寄せられ、こうした情勢から、まず花の万博の点検作業にとり組んだ。

以下は、花博の点検を目的に開いたシンポジウムの要旨である。

平成2年の年の瀬も押し迫った12月20日(木)、午後4時より大阪府立労働会館にて、花の万博総括シンポジウムがJLCA関西支部主催で行われた。

シンポジウムは「国際花と緑の博覧会とは何であったか—造園界からの総点検」と題して、前半はスライドを中心に、後半は6名のコメンテーターにより、シンポジウム形式で行われた。



前半のスライド会は花博の計画、設計等に携わったJLCA会員18社より、各社毎に5枚程度のスライドとその簡単な説明書を提出してもらい行われたものである。過ぎ去った花博の確認をすると同時に、知られざる裏話、隠れた苦労話、あるいは気がつかなかったコンセプト、デザインポリシー等が披露され、なかなか面白い内容であった。今回のこのスライド会の成功が花博記録集作成の引き金の一つとなったのも事実である。花博を通して得られた様々な経験や成果あるいは、隠れた苦労話やエピソード等を何んらかの形で残そうではないか、あるいは外へ向けて発表すべきであるとの意見が出され、記録集作成の話に発展して

いった。

また、後半のシンポジウムにおいては、宮崎研一氏(大阪市・元花博協会)松本守氏(住宅・都市整備公団・元花博協会)坂上秀雄氏(㈱日造協近畿総支部)鷺尾金弥氏(元花博園芸プロデューサー)藤田好茂氏、大塚守康氏(JLCA関西支部)の6名のコメンテーターにより、花博を様々な角度から総括の意味をこめて、総点検してもらった。花博が各々の立場から語られ、得るところが大きかったと同時に反省すべき点も多いことが再認識され、21世紀に向けて、造園界の今後の動きの大切さが確認された。

このシンポジウム司会者、糸谷正俊氏(JLCA関西支部)の総評を借りると、シンポジウムの概略の内容は次のとおりであった。



●(㈱)日本造園コンサルタント協会の現在の勢力は、約130社、総会員数約3,000人の小規模な団体であるが、花博という国際博を準備し、成功させることに大きく貢献した。これにより、一定の社会的評価を勝ち得ることができ、大きな自信につながった。今後、都市計画、環境問題、景観問題等の分野への進出の舞台が用意されたといえる。その反面、私達コンサルタントの責任と使命は今後ますます大きくなることが予測される。

●環境博、生命博ともいわれた今回の花博において、私達は社会的な趨勢にどれだけ応えることが出来たかを十分に点検してみる必要がある。私達は今回の花博において、アジアの風土性、自然系素材の使用、あるいは直線的なデザインを出来る限り避けて、ナチュラルデザインで対応してみたが、その成果はどうであったろうか。今後は、自然、風土、伝統とい

った要素を基調にして、新しい都市づくり、環境づくりに果敢に挑戦していかなければならない。

●花博のような、大きなプロジェクトを推進させていくためには、デザインや図面だけではむづかしい。コンセプトやポリシーを明確に表現する言語と、それを裏付ける数字が必要であり、言語、絵、数字を一体化させていかなければならないことを痛感させられた。事実、このためにこそ、私達コンサルタントが存在するのであって、会員相互の理解を深めるためには、是非とも共通言語が必要となってくる。共通言語を確立することによって、私達はもっと積極的に外に向けて自信のある発言ができるのではないか。

●今回の花博により、私達是否応なしに、国際化の波に巻き込まれていった。こういった意味で今回の花博は大きな試練であり、無事に乗り切った自信は大きい。特に次代を背負う若い人々にとっては、かけがえのない経験であり、より広い世界が垣間見えたということは今後のための大きな財産であるといえる。



2.花博の提起したものと造園の未来

以下は関西在住の造園の先生方に「花博の提起したものと造園の未来」という一応のテーマで小文をお願いしたものである。

先生方には、テーマにしばられることなく、先生方にとっての花博を自由にお書きいただきたい旨を連絡し、大変御多忙のところを御無理いただいた。

あらためて感謝する次第である。

鈴木 登 (近畿大学農学部助教授)

7月中旬、日本美術館の西北にある緩い斜面の本立の中で何人かが午睡をしているのに気付いた。もともとそこは、その下が弁当を拡げるのに格好の芝生なので、そこから溢れ出た人が缶ビールに酔って横になっているの間々見かけた所ではある。しかしそれらの人達とは明らかに様子が違った。

暫くすると、その午睡は本格化してきた。ビニールシートだけでなく、枕や子供のためにタオルケットまで持参しだした。持ち前の野次馬根性がむらむら。のそのそと仲間入りに斜面を上る。意図的に作ったと思われるほど横になる場所はいくらでも見付かる。横になってみると成程すごく快適。

こんな贅沢をしている人は皆、近所の住民で1万2千円の券の有効利用者と勝手に決めつけたのは大きな間違い。日帰り圏ではあるが案外遠くから来ている。それも毎回料金を払って。入場は4・5・6回目。さすがに寝にだけ来た人はいない。花の谷、花栈敷、日本庭園、山のエリア、美術館など並ばなくてよい見所をちゃんとご存じでその中の2、3を歩いて、その後がここ。

「もっとチャチな美術展を見に東京に行っても1人3万はかかるでしょう」と聞かされて、入場料勿体無くはないと聞くのは止め。「おじさんの齢でこの良さが分かる人って少ないんじゃない」と言われて見回せば、成程、皆若い。今度は下に降りて、「あ、あんな処で寝ている」と呟いてみる。「いやあねえ、ちゃんと家に帰って寝ればよいのに」と眉を顰めるのは春を過ぎた大オパン。「ほんと、気持ち良さそう」と見上げるのは例外なく若い人。

この設計を見て、この種の利用を密か

に期待していた人が何人かいたと思う。海の中道に大きな芝生広場がある。造成途中に訪れた時、「日本人はこの種のものを生かして使う癖がないから果たしてどうなることか」と言う心配を聞いたが、その心配は花博の斜面では杞憂となり、見事に彼等は緑との共生を享受する方法を開発していた。

私のセンスをナウイと誉めて呉れたお姉さん、御免なさい。私は貴方達に教えられてやっとう良さに気付いただけの鈍感です。そのお詫びの印に、今ここで、貴方達の琴線に触れるようなナウイものを創ろうとしているお兄さん達に、また良い仕事をして下さいとお願いをしています。

近藤 公夫 (神戸芸術工科大学教授)

—基本構想の提言から—

IFLA1985が終った時、関西本部長にして全力投球をした心算の筆者が心の空際に感じたのは「これで良かったのか」の自問自答だった。

ドイツ造園学会会長のシュミットが「史上最高の大会」と今でも誉めてくれる大会、代表者会議から見学旅行まで十日に余る東奔西走に「お前、糖尿や」と医者に叱られた6年前の反省は今も胸に疼く。

国際造園家会議の開催が造園家の社会的な地位の向上ないし活動の活性化に何程の寄与となったか、と同様、花と緑の博覧会は、人々と「みどり」との交流に如何なる起爆剤となり得たか。

しかも、基本構想にうたわれた通り21世紀以降にも地球を青い星たらしめつつけるため、人と「みどり」の交流を基盤にした地球緑化のアクションは焦眉の急にある今においてである。

花博の基本構想を立案する際、そこに園芸産業の活性化に結びつける需要刺激のための論述を求めるかのような動き、自然保存運動の主張を重からしめようとする議論など、主張はそれぞれにあった。

とはいえ、21世紀後半には地球上に百億人をこす人類社会が形成され、その雑踏が避難い事態を考える時、そこに求められる

エコシステムのダイナミックなハーモニーの構築こそ造園人の課題意識でなければならない。

基本構想の中に「雑踏に耐える緑」という言葉は「緑をして雑踏に耐えしめる未来こそ造園人の課題に他ならない」という悲願の示唆でもある。

そして「花と緑の祭礼の場」という提言には「この祭礼こそ万人に花と緑の貴重さを認識せしめ、その上に青き地球の継承に思いを至さしめる契機であれかし」の願望が流れている。

さもあらばあれ、我々は博覧会の盛大に酔うを許されない。

読者は「青き地球を我々が築く」という自負を井の中の蛙と見る社会の現実に挑戦せねばならない。

端的にいえば「建築界と植物学者が手を結べば造園など必要ない」という風潮は我々の学生時代から今に至っている造園人の危機意識に通じようし、現実に若い世代は泥臭い現場よりも他に道を求めるファッションの中にいる。

「その現実を如何に考え、我々の明日を構築し得るか」こそ造園の未来にかかる課題であり、博覧会は反省の端緒ではなかったかと考える。

高橋 理喜男 (日本大学農獣医学部教授)

結構高い入場料にもかかわらず、連日押すな押すな盛況を呈し、心配された夏バテも乗り越えて、軽く2千万人を突破したのだから、誰がみても大成功といえよう。しかし、裏返していえば、日常的に出合う身のまわりの緑や花の質しさがおびき出した結果といえなくもない。ヨーロッパの場合を考えてみると、そちこちの国で開かれてきた国際花博の会場をみても、それと同程度の規模の都市公園をみても、花と緑のあてやかさやゆたかさにおいて、それほど大して違いがない。とすると、花博を見るために、わざわざ遠くから出掛けてくる必要もないわけだ。結局のところ、私たちのこれからの課題は、花博という非日常的空間を、ヨーロッパなみに、どこまで日常化で

きるかにある。

今度の花博の魅力が花を中心とするデザインや演出に負うところが大きかったことは言うまでもない。と同時に、それを裏から支えてきた最高の管理水準も忘れるべきではない。おそらく、これだけの至れり盡くせりの管理水準を都市のすべての公園、路地裏の小公園に至るまで均霑させることができたなら、公園は水を得た魚のように生き返るだろう。

もちろん、いまでも花博に勝るとも劣らない管理水準が適用されている都市公園もないことはない。それはたいてい都市の顔ともなる中央公園のように、少しでも“わがまち”のイメージアップの片棒をかついでくれる場合か、有料の特殊公園に限られている。その他のこのりの公園は、十把ひとからげにされ、画一的で安上りの劣悪な管理水準に甘んじてきたのが、これまでの実態ではなかったか。いわゆる少数のエリート公園と多くのなみの公園の落差は想像以上に大きいと思われる。

ウルム市の児童公園は戦災復興期の市民運動によって推進され、ドイツでもっとも整備されているとあってよい。ここのとある児童公園を訪れた時の印象は今でも忘れない。遊戯施設がすべてピッカピカに光り輝き、子供達は嬉々として遊んでいたからである。

経済大国を誇るなら、花博の管理体制のノウハウを各都市への置土産として残して欲しいと思う。もし、それが実現できたら、長年の公園行政の悩みも立ちどころに解消すことうけ合いだ。そうしないと、心から公園を愛する市民の公園離れはさらにひどくなるにちがいない。

安部 大就 (大阪府立大学農学部教授)

過去の万国博覧会でわれわれの間で評価されるものとして幾つか挙げられるものがあるが、その一つとして1893年にアメリカのシカゴ市で開催されたコロンビア博覧会がある。敷地選定と敷地計画を造園家オルムステッド、会場建築を建築家パーナムが担当したことは周知の通りである。白亜

の展示館、広大なモールによる計画はホワイトシティと呼ばれ、アメリカ人に感銘を与え、シビックデザインの先導的なものとして、また都市美運動(City Beautiful Movement)の動機となった。これを受けてアメリカの各都市は、シビックセンターの形成、緑豊かな街路、公園・噴水・彫刻などの設置により、美しい都市整備に努め、都市計画行政組織を確立したといわれている。まさしく色々な課題に対処しながらも鶴見緑地における6ヶ月にわたり開催された博覧会が我が国の今後の文明と環境の調和に対しての方向性を明確に示したこと、そしてそれを継承していくべきことが確認されたことの意義は大なるものである。

すなわち「花と緑と人間生活のかかわりをとらえ、21世紀へ向けて潤いのある豊かな社会創造」をめざした『国際花と緑の博覧会』は、屋内・屋外展示を通じて命ある花や緑と英知ある生き物としての人間とのこれまでの関係を再認識するとともに、生命の尊厳、生き物の営みと環境といった視点に立った地球規模での環境問題を根底とした新しい関係のありかたを模索していくための数々のメッセージや情報を発信したものと評価されよう。従って、基本理念に唱われた花と緑を身近かなものとする技術、園芸と、それにつらなる生命科学は画期的な意味を持ち始めたことは言うまでもないが、環境創造への新たな取り組みを如何に実りあるものとしていっかが我々の専門領域における大きな責務であることを自覚せねばならない。

日本造園学会においても、新たな活動の一つとして造園作品選集の刊行に踏み出したことが報じられ、その作業がはじめられているが、まさしく産・官・学の努力により「ランドスケープ・アーキテクト」としての社会的責務を遂行するためのプロフェッションたるべく、いかに職能集団として活動すべきかを熟考し、どのような行動計画を展開するか英知を模索することが肝要である。今まさに、そのためのランドスケープ・アーキテクトとしての資格のありようを真剣に検討してゆく体制作りが求めら

れよう。このことは、これまでも度々論じられてきたことであるが、心して取り組んでゆくべきことであると考える次第である。

中村 一 (京都大学農学部教授)

—花は栄える緑は潤れる—

国際花と緑の博覧会という正式名称のなかの緑は、殆どのばあい省略されて、花の万博とか、花博とかと呼ばれた博覧会であった。そもそも今度の博覧会の本質からみれば、緑は最初から付けたりだったと私は考える。今日、日本の都市で緊急に必要なのは、花である。何故ならば、日本の都市では急速に建築物や舗装面や地下埋設物が増えてきて、大地に根差した植物(私はこれを緑という)を育てるのが困難になりつつあるからで、ここに緑に代わって花が登場してくる最大の理由があると思う。

花は、たとえ大地から切り離された鉢の中でも、灌水施肥さえ適当に行われれば、正常でいきいきとした姿を見せてくれる。たとえ短い間でも、乾いた街のなかに自然の生命の輝きをあたえてくれる。花は、街のたんなる飾りではなく、人工の街で自然とのつながりを感じるのに必要な生きものである。都市化と文明化は車の両輪であるから、先進文明国の都市で花が栄えるのは必然的である。今度の花博は、日本もようやく先進国並の都市文明に突入したことを確認する象徴的な出来事であったといえよう。

緑は、大地にしっかりと根を張り、その場所の自然性を殆ど永続的に感じさせる生きものとして、花よりも基本的なものであり、ずっと重要なものである。しかし、緑は花のように容易にコントロールできるまでには至っていない。現代都市のなかで緑が如何に虐待されているかを想像してもらいたい。奇形にされ、息たえだえの街路樹。落葉が厄介だからと切り倒される大樹。夏のひでりに放っておかれる街の緑。われわれは街の中で、緑を生きものとして健全に育てるのに必要な社会的力量を持つに至っていないのである。われわれがその力量に達した時には、都市の中に緑を持ち込むの

ではなく、緑を中心として都市を作るという考えが常識になっているにちがいない。

だから、今度の花博で緑が冴えなかったのはやむを得ないと思う。会場基本計画段階では、殆どそのまま活かすとされていたゴミから生まれた緑の山が、なしくずしに禿げていったのも、早すぎた都市の緑のせいと諦めたい。順序は逆のようだが、われわれは先ず花から始める必要があったのだ。もう一度、このような博覧会がやれるとすれば、次こそは、名実ともに国際緑と花の博覧会にしたいものである。もっともその準備には、最低三十年はかかるかと踏んでおくべきであろう。

花博の幕が降りて一年たったこの秋、いろいろな記録が続々とまとめられているのを見るにつけ、改めてこの催しの規模の大きさと突貫工事の凄まじさを思い起こす。それからさらに数年さかのぼって、天満橋のたもとの小さなビルに結集していた造園コンサルタント諸君の希望にあふれた眼差しを忘れることはできない。彼らのその後の苦労を、私は知らない。しかし花博の設計と監理の経験は、彼らを一回りも二回りも大きな人間にしたことを、私は疑わない。

(5) 参考資料

■ EXPO '90 国際花と緑の博覧会 会場全景

■ EXPO '90 国際花と緑の博覧会 会場計画図

出典

EXPO'90 国際花と緑の博覧会
花博の会場計画とデザイン

JLCA 取り組みの記録

発行：(社)日本造園コンサルタント協会

監修：(社)日本造園コンサルタント協会・花博会場計画記録集作成実行委員会

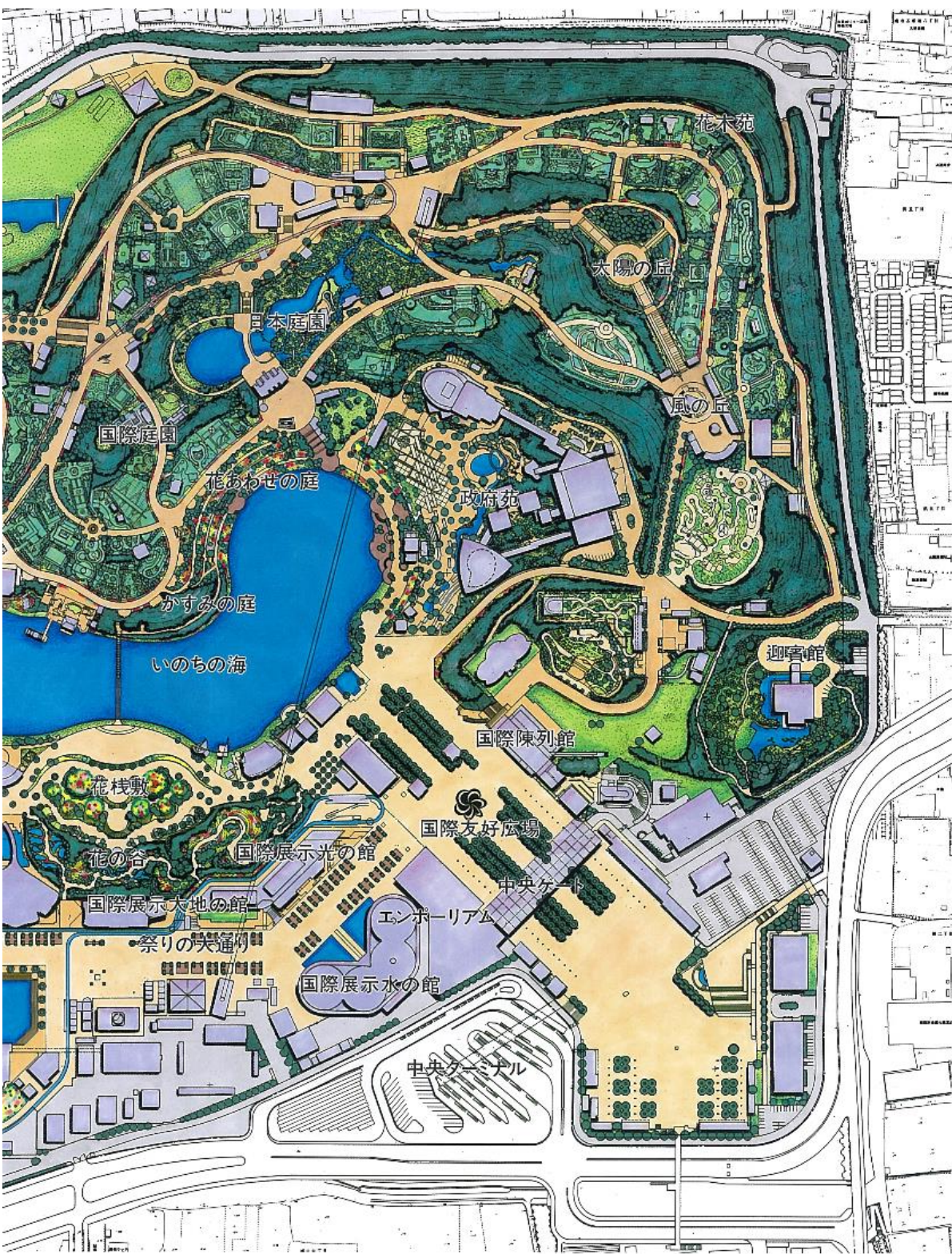
会场全景





会場計画図





「国際花と緑の博覧会 (1990) に学ぶこと」講演会

- || 日 時 || 平成 27 年 1 月 31 日 (土) 13:00 ~ 17:00
- || 場 所 || 大阪市鶴見区緑地公園 2-163 鶴見緑地内 花博記念ホール (陳列館ホール)
- || 主 催 || (公社) 日本造園学会関西支部・(公財) 国際花と緑の博覧会記念協会・(一財) 大阪スポーツみどり財団
大阪市
- || 協 力 || (一社) ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部